岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 155

船山遺跡

県道西大寺備前線交差点
改良工事に伴う発掘調査

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 155

船山遺跡

県道西大寺備前線交差点
改良工事に伴う発掘調査

2001

岡山県教育委員会

序

本書は、備前市畠田に所在する船山遺跡の発掘調査報告書です。船山遺跡周辺の吉井川下流域東岸は、古墳時代前期の大形古墳や古代寺院跡などの遺跡が多く見られ、古くから注目されている地域です。また、船山遺跡は過去二度の調査が行われています。昭和44年度の山陽新幹線建設に伴う調査では、当時県下ではまだ資料の少なかった弥生時代前期後葉～中期中葉の土器が出土し、この時期の基準資料にもなっています。昭和58年度の民間グラウンド造成工事に伴う調査では、弥生時代前期後葉に掘削された環濠の可能性が考えられる大溝が検出されています。

今回の発掘調査は、国道２号線と県道西大寺備前線の交差点を改良する工事に伴うもので、工事予定地内が周知の船山遺跡の範囲内であったことから事前に確認調査を行ったところ、遺構の存在が明らかになり、記録保存のための発掘調査を実施することになったものです。今回の調査対象面積は650㎡と狭い範囲でしたが、弥生時代前期後葉から中期中葉にかけての竪穴住居や土壙、溝などの遺構を検出しました。また、縄文時代晩期から近世にいたる遺物が多く出土し、この地点が生活の拠点として長い期間にわたって利用されていた様子を窺い知ることができます。

これらの成果を収めたこの報告書が、地域の文化財の保護・保存のために活用され、地域の歴史を研究する資料として利用していただければ、まことに幸甚なことと存じます。

最後に、発掘調査にあたりましては、岡山県東備地方振興局をはじめ、地元町内会及び関係各位から賜りました多大な御理解と御協力に対し、衷心より厚くお礼を申し上げます。

平成13年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正　岡　睦　夫

例　　言

1　本書は、県道西大寺備前線交差点改良工事に伴い、岡山県東備地方振興局の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成９・11年度に発掘調査を実施した船山遺跡の発掘調査報告書である。

2　船山遺跡は、備前市畠田258－3ほかに所在する。

3　調査は、確認調査を平成９年６月11・12日に、全面調査を平成10年１月９日から３月31日まで実施した。立会調査は平成11年４月５日に実施した。報文では、全面調査を１次調査、立会調査を２次調査と記述している。調査した全体の面積は650㎡である。

4　調査は、確認調査を岡山県古代吉備文化財センター職員江見正己・岡本泰典が、全面調査を岡山県古代吉備文化財センター職員井上弘・木原義明・時實奈歩が、立会調査を岡山県教育庁文化課職員松本和男・大橋雅也が担当した。

5　報告書の作成は、岡山県古代吉備文化財センターにおいて平成10年度に実施し、平井勝が担当した。執筆は井上・大橋・時實が行い、編集は平井・時實が担当した。

6　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力を得た。

7　遺物の整理については、山本千恵子・熊代千津子・富士智恵子・横田多美子の協力を得た。

8　掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図（備前瀬戸・片上）を複製・加筆して使用した。

9　出土遺物・実測図・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－3）において保管している。

凡　　例

1　遺構全体図および、遺構図の北方位は、基本的に真北である。

2　高度はすべて海抜高である。

3　遺構ならびに遺物の実測図の縮尺は図示しているが、原則として下記の通りである。

　遺構：竪穴住居（1/60）　土壙・溝断面（1/30）

　遺物：土器・瓦（1/4）　石器・石製品（1/2）

4　土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の不確かなものである。

5　本報告書における土層名称は、各担当者によって表記方法が異なっており、統一できていない。

6　本報告書に掲載した遺物の番号は、土器・瓦、石器・石製品にわけて通し番号をつけ、そのうち石器・石製品については、番号の前に「S」を付している。

7　本報告書に掲載した拓本のうち、口径の計測が不可能な個体については、断面図の左側に外面の拓本を載せている。

8　土器観察表における色調は、『新版標準土色帳（1988年版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

9　本報告書に用いた弥生時代の遺構・遺物の時期については、編年対比表に表記し、それ以外の時期については統一していない。

編　年　対　比　表

時代＼遺跡			百間川（註1）	雄町（註2）	本報告書
弥生時代	前期	津島	百間川前期Ⅰ		弥生時代前期前葉
		門田	百間川前期Ⅱ	雄町1	弥生時代前期中葉
			百間川前期Ⅲ	雄町2	弥生時代前期後葉
				船山2	
	中期	南方	百間川中期Ⅰ	高田	弥生時代中期前葉
				雄町3	
		菰池	百間川中期Ⅱ	船山5	弥生時代中期中葉
				菰池	
				雄町4	
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前山東	弥生時代中期後葉
				雄町5	
		仁伍		雄町6	

註1　岡山県教育委員会が1977年から実施している、「百間川遺跡群」の発掘調査に用いられている編年である。

註2　「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972年

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第2章　調査の経緯 …… 4
　第1節　調査に至る経過 …… 4
　第2節　調査の経過と体制 …… 4
第3章　調査の概要 …… 7
　第1節　調査区の概要 …… 7
　第2節　1次調査の遺構と遺物 …… 11
　　1．竪穴住居 …… 11
　　2．土壙 …… 11
　　3．溝 …… 17
　　4．粘土採掘坑 …… 18
　　5．遺構に伴わない遺物 …… 25
　第3節　2次調査の遺構と遺物 …… 27
第4章　まとめ …… 32
　　1．遺物と遺構の変遷について …… 32
　　2．弥生時代の集落について …… 33
　　3．竪穴住居－1について …… 34
遺物観察表
　　土器・瓦 …… 35
　　石器 …… 38

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000) …… 2
第２図　調査区位置と過去の調査区位置(1/2,500) …… 6
第３図　調査区の位置(1/500) …… 7
第４図　調査区の土層断面（1/300・1/600)…… 8
第５図　調査区の遺構配置（1）（1/400•150) …… 9
第６図　調査区の遺構配置（2）（1/150）…… 10
第７図　竪穴住居－１（1/60）…… 11
第８図　土壙－１（1/30）…… 11
第９図　土壙－２（1/30）・出土遺物 …… 12
第10図　土壙－３（1/30）…… 12
第11図　土壙－４（1/30）・出土遺物 …… 13
第12図　土壙－５（1/30）…… 13
第13図　土壙－６（1/30）・出土遺物 …… 14
第14図　土壙－７・８（1/30）…… 15
第15図　土壙－９（1/30）…… 15
第16図　土壙－10・11（1/30）…… 15
第17図　土壙－10出土遺物 …… 15
第18図　溝－１・２（1/30）・出土遺物 …… 16
第19図　溝－３（1/30）・出土遺物 …… 17
第20図　粘土採掘坑－１・２出土遺物 …… 18
第21図　粘土採掘坑－４・５・６出土遺物 …… 19
第22図　粘土採掘坑－７・８・９出土遺物 …… 20
第23図　粘土採掘坑－10・11・12・13出土遺物 …… 21
第24図　粘土採掘坑－14出土遺物 …… 22
第25図　粘土採掘坑－15・16・18・21・24出土遺物 …… 23
第26図　粘土採掘坑出土遺物 …… 24
第27図　遺構に伴わない遺物（1）…… 25
第28図　遺構に伴わない遺物（2）…… 26
第29図　土壙－12検出位置（1/500）…… 27
第30図　土壙－12（1/30）…… 27
第31図　土壙－12出土遺物（1）…… 28
第32図　土壙－12出土遺物（2）…… 29
第33図　土壙－12出土遺物（3）…… 30
第34図　土壙－12出土遺物（4）…… 31
第35図　土器変遷図（1/10）…… 32
第36図　弥生時代集落想定位置図（1/4,000)…… 33

図版目次

図版１－１　遺跡近景（南から）
　　－２　１区近景（南から）
　　－３　１区の作業風景（北から）
図版２－１　竪穴住居－１（南東から）
　　－２　土壙－１
　　検出状況および断面（西から）
　　－３　土壙－１（西から）
　　－４　土壙－２（北から）
　　－５　土壙－２断面（北から）
図版３－１　土壙－３（西から）
　　－２　土壙－７＜向う側＞
　　８＜手前＞（西から）
　　－３　溝－１（北から）
　　－４　４区全景（北から）
　　－５　５区全景（北から）
　　－６　土壙－12（東から）
図版４－１　土壙－２出土遺物
　　－２　土壙－４出土遺物
　　－３　土壙－６出土遺物（1）
図版５－１　土壙－６出土遺物（2）
　　－２　土壙－10出土遺物
図版６－１　溝－１出土遺物
　　－２　溝－２出土遺物（1）
図版７－１　溝－２出土遺物（2）
　　－２　溝－３出土遺物
図版８－１　粘土採掘坑出土遺物
図版９－１　遺構に伴わない遺物
　　－２　包含層・粘土採掘坑出土遺物
図版10－１　土壙－12出土遺物

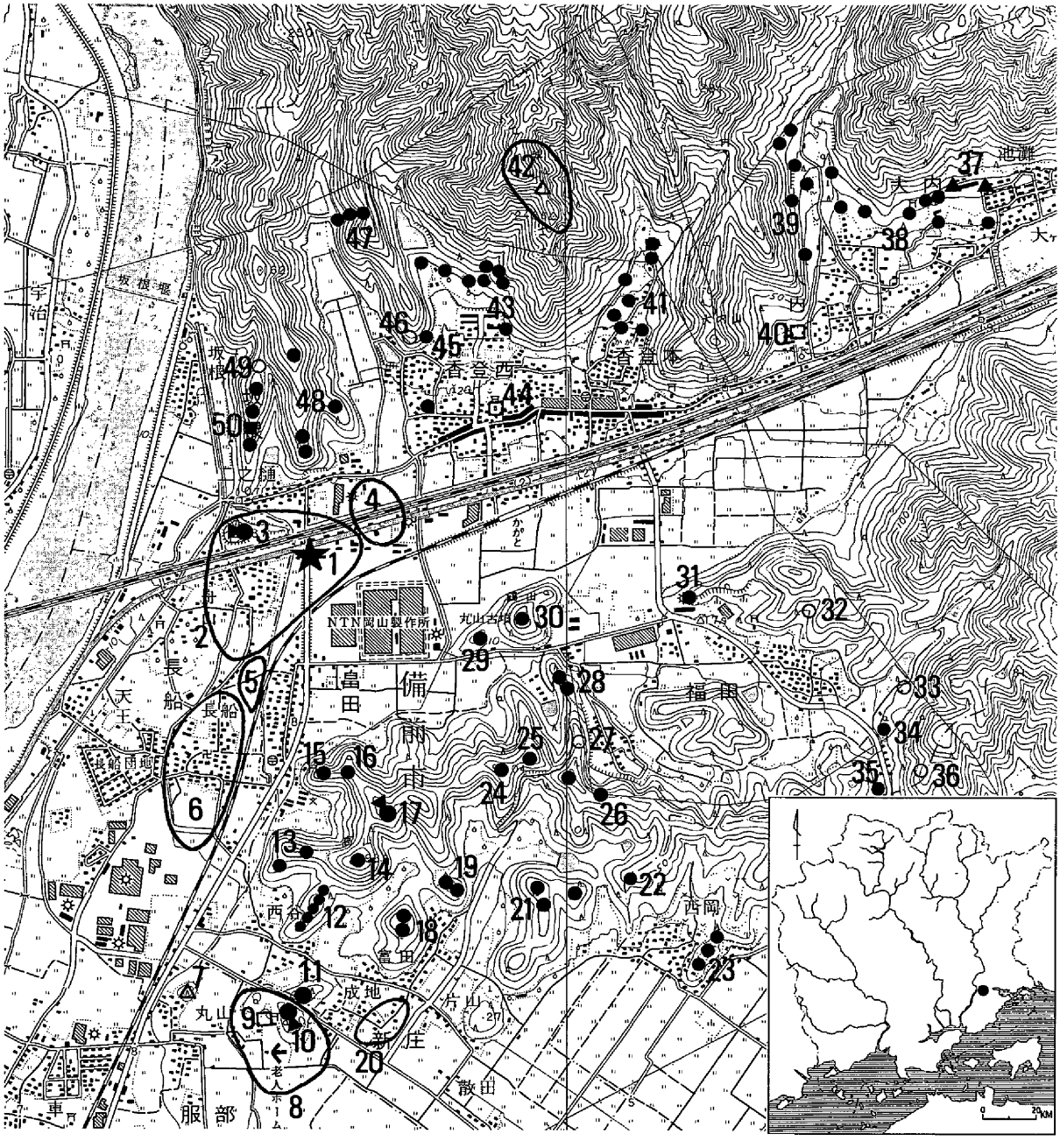
第１章　遺跡の位置と歴史的環境

船山遺跡の所在する備前市は岡山県東南部に位置し、東を兵庫県赤穂市、西を岡山市、南を邑久郡、北を和気郡に接している。備前市の西端を南流する吉井川は、津山盆地から吉備高原を穿入蛇行しながら熊山山塊を迂回し、山地を出て下流域に肥沃な沖積平野を形成しており、その沖積平野の北端、吉井川の東岸に遺跡は立地している。また、遺跡の東側には熊山南麓の大谷山とさらにその南に位置する西大平山との間に東西に細長い香登平野が広がり、また両方の山塊の谷の出口には扇状地が発達している。現在の集落の大部分は、この吉井川の形成した自然堤防上と、香登平野の扇状地上に位置している。

船山遺跡周辺では、旧石器時代以降、多くの遺跡の存在が知られている。旧石器時代の遺跡としては、丸山遺跡で後期旧石器時代のチャート質のナイフ形石器が１点出土している。縄文時代の遺跡は、明確な遺構は検出されていないものの、新庄西畑田遺跡において後期前半の土器が、丸山遺跡で後期前半の有文皿が出土しており、今回の調査でも縄文時代晩期末の土器が出土している。弥生時代の遺跡で一番古いものは船山遺跡であり、環濠の可能性も考えられている大溝が検出されている弥生時代前期後葉から中期にいたる母村的な集落の存在が想定され、そして中期を通じて船山遺跡や長船西遺跡で集落が営まれている。長船西遺跡・丸山遺跡では後期後半の集落の存在が知られるが、いずれも断片的で具体像は不明である。

古墳時代になると、船山遺跡周辺では多くの前期古墳が築かれるようになり、前期を通して首長系譜がたどれる地域であるといえる。まず、全長約68.4ｍの前方後円墳である長尾山古墳がある。それに続いて全長87ｍの前方後円墳である花光寺山古墳と、直径約41.5ｍの円墳である新庄天神山古墳が長尾山古墳の立地する丘陵の南に位置する独立丘陵上に隣接して築かれている。さらに直径55ｍ～68ｍの円墳である鶴山丸山古墳と全長41.8ｍの造出付きの円墳の小丸山古墳が長尾山古墳の北側に築かれる。長尾山古墳では透かし孔が三角形と巴形で、口縁部が外反する円筒埴輪片が表採されており、船山遺跡周辺では最も先行する前期前半に築造された古墳である。これに続く花光寺山古墳は、埋葬施設に長持形の組合式石棺が直葬され、石棺の北側の小石室からは鏡２面や素環頭太刀など、多くの副葬品が出土し、円筒埴輪には透かし孔に長方形や三角形のものが多く見られる。新庄天神山古墳は近年の測量調査によって直径約41ｍの大形円墳であることが判明し、埋葬施設は割石を積んだ石室に石棺が置かれ、石室の天井石が棺身の蓋を兼ねており、表採された埴輪には花光寺山古墳のものより後出する特徴を持つ。鶴山丸山古墳は内部主体の竪穴式石室に舟形石棺が置かれており、この石棺には家屋文と日輪文が施文され、合計31面もの大量の鏡が副葬されるなど注目される。副葬品に滑石製品を伴うことから前期後半から末の時期と考えられる。小丸山古墳は鶴山丸山古墳の西側に位置しており、内部主体や副葬品などは知られていないものの、40ｍを越す大形の造出付円墳であることから鶴山丸山古墳の年代に近いと考えられる。

この後、船山遺跡周辺で大形の古墳が築造されるのは、大谷山から派生した丘陵の南端に位置している全長約60ｍの前方後円墳である船山古墳を待たなければならない。船山古墳は表採された須恵器の器台や埴輪から５世紀末～６世紀初頭の時期であると考えられる。また、これらの首長墳と考えら



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

1．調査地点
2．船山遺跡
3．船山古墳
4．大門遺跡
5．長船東遺跡
6．長船西遺跡
7．丸山城址
8．丸山遺跡
9．服部廃寺
10．花光寺山古墳
11．新庄天神山古墳
12．上の山古墳群
13．目田山古墳群
14．高山古墳
15．畠田天満宮宮山古墳
16．歓喜天神社古墳
17．長尾山古墳
18．地神山古墳群
19．荒神山古墳群
20．新庄西畑田・東田遺跡
21．禿山古墳群
22．黄金山古墳
23．西岡古墳群
24．宮山古墳
25．宮山東古墳
26．総南奥１号古墳
27．寺奥遺跡
28．宝満坂古墳群
29．小丸山古墳
30．鶴山丸山古墳
31．新羅古墳
32．小屋谷散布地
33．散布地（窯跡？）
34．宮ノ峠（天狗）古墳
35．宮ノ峠古墳
36．配石遺構
37．池灘窯跡群
38．大内古墳群
39．大滝道古墳群
40．香登廃寺（大内廃寺）
41．奥谷古墳群
42．香登城址
43．山根古墳群
44．香登西廃寺
45．大ヶ池古墳
46．中世墓
47．塚の元古墳群
48．間山古墳群
49．坂根龍神様（石積遺構）
50．坂根古墳群

れる大形の古墳のほかに、小規模の古墳が熊山の南麓と西大平山から西に派生する丘陵上に多く分布している。熊山南麓には内部主体を横穴式石室とする後期古墳が多く存在する。そして香登の谷筋の

丘陵斜面には奥谷古墳群が、大内の谷筋には丘陵東斜面に大滝道古墳群が、西斜面には大内古墳群などが存在しており、このように後期古墳は丘陵の裾部に立地している。その他、内部主体が箱式石棺の上の山６号墳や、内部主体が粘土槨か竪穴式石室と推測されている間山３号墳が、丘陵頂部や尾根上に立地することから後期古墳とそれ以前のものとでは、占地が異なっていると考えられる。いっぽう古墳時代前期の集落遺構は、丸山遺跡で竪穴住居が２軒、船山遺跡・大門遺跡では吉井川の水を引き入れるための灌漑用水路と考えられる大溝が検出されている程度である。新庄東田遺跡と丸山遺跡では朝鮮系軟質土器が出土しており注目される。丸山遺跡では古墳時代後期の須恵器が出土しているが、遺構は検出されていないことなど、これら古墳の造営を支えた基盤となる集落については、不明な部分が多い。

古代の遺跡は、仏教の広がりに伴う寺院の建立が７世紀後半以降全国的に広まりを見せるなか、船山遺跡周辺でも三つの寺院跡が確認されている。香登平野の北側の扇状地上には香登西廃寺・香登廃寺（大内廃寺）が、花光寺山古墳の西側には服部廃寺が建立される。香登廃寺は雇用促進住宅建て替えの際に平城宮式や備前国分寺式の軒瓦が出土しており、創建は奈良時代後半であるとされる。香登西廃寺は香登西に所在する石長姫神社に塔跡と考えられる礎石が第２次世界大戦中までは存在し、奈良時代のものと考えられる瓦が出土したという。また、周辺の地名に大門・西の坊・経覚堂などがあり、寺の存在を暗示している。服部廃寺は、平成３年～８年にかけて発掘調査が行われ、金堂・講堂などが検出されており、四天王寺式伽藍配置が想定されている。出土した瓦などから７世紀末に創建された。このように隣接して三つもの寺院が建立されるということは、古墳時代から引き続いてこの地域が、吉井川下流域の中でも中心的役割を担っていたことをうかがい知ることができる。

鎌倉時代末期になると山陽道が三石～和気～牟佐を結ぶ北路から、三石～片上～福岡の南路に移り、香登平野の北側山裾を通るようになり、また吉井川の水運など、この地域は交通の要地となって行く。近くの「福岡」の市の賑わいが『一遍上人絵伝』に記載されているのは有名である。鎌倉時代中期以降の長船派刀工の居住域は、船山遺跡の南にあたる長船町長船にほぼ比定されており、長船西遺跡の発掘調査で中世と比定される鉄滓が出土している。備前焼の窯も熊山南麓に数多く築かれるようになり、香登平野では平安時代末～鎌倉時代初頭と考えられる池灘窯を西限とするようである。このように船山遺跡周辺は交通の要衝であると同時に、吉備東部地域の生産・流通活動の中心地ともいえる地域として、発展を遂げていく。　（時實）

（参考文献）
・泉本知秀　正岡睦夫「船山遺跡」「大門遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会 1972年
・田代健二『船山遺跡発掘調査報告』エヌ・テー・エヌ東洋ベアリング運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会 1985年
・田代健二「備前市内採集の遺物について」『古代吉備』第10集 1988年
・田代健二「備前市文化財調査年報」(1)『備前市埋蔵文化財調査年報』４ 1988年
・池田浩・大谷博志・杉山一雄「服部廃寺」『長船町埋蔵文化財発掘調査報告』２ 長船町教育委員会 1997年
・長船町史編纂委員会『長船町史 史料編（上）考古 古代 中世』長船町 1998年
・岡山県史編纂委員会『岡山県史』第18巻考古資料　1986年
・千葉豊「備前市新庄西畑田遺跡採集の縄文土器」『古代吉備』第９集　1987年
・平井典子「備前市新庄西畑田遺跡・新庄東田遺跡採集の資料―朝鮮系軟質土器を中心として―」『古代吉備』第９集 1987年
・弘田和司・古市秀治・森宏之「岡山県吉井川流域における古墳の展開（上）--備前市長尾山古墳 牛窓町黒島１号墳の測量調査―」『古代吉備』第14集 1992年
・小郷利幸・草原孝典・高田知樹・馬場昌一「吉井川、砂川流域の古墳の測量調査（2）―古墳時代前、中期の首長墓の動向―」『古代吉備』第20集 1998年
・小郷利幸・草原孝典・馬場昌一「吉井川、砂川流域の古墳の測量調査（3）―古墳時代前、中期の首長墓の動向―」『古代吉備』第21集 1999年
・竹内理三編『角川日本地名大辞典 岡山県 33』角川書店 1989年
・『土地分類基本調査 和気・播州赤穂』岡山県企画部土地対策課 1982年

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

船山遺跡の調査は、過去２回発掘調査が実施されている。最初は、昭和44年に山陽新幹線の建設工事に伴い調査されたものである。その調査場所は、今回の調査地点の北約100ｍに位置する。住居跡、土壙などが検出されている。次の調査は、昭和58年にグラウンド造成に伴う調査で、グラウンド周囲に造られる用水路部分について実施された。その調査場所は、今回の調査地点にもっとも近い部分では約20ｍ東に位置している。この調査においても、土壙、溝などを検出しておりこの一帯には広く遺跡が存在することが予測されていた。

今回の調査地点は、国道に交差する県道の拡幅部分である。調査は、国道に交差する県道はその幅員が狭いため、それを拡幅改良する工事に伴うものである。用地の買収が完了した後の平成９年６月に確認調査を実施した。その結果、一部に瓦粘土採取による攪乱は見られるものの遺構の存在が確認された。その成果を基に東備地方振興局土木部とその取り扱いについて協議した。振興局としてはこの改良工事に早期に着手したいことから平成10年１月から全面調査を実施することが確定した。

第２節　調査の経過と体制

県道西大寺備前線交差点改良工事に伴う発掘調査は、岡山県東備地方振興局の依頼を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが平成9年6月に確認調査を、平成10年1月から全面調査を実施した。しかし、一部未買収地が存在したため、用地問題の完了後、平成11年４月に岡山県教育庁文化課が立会調査を実施した。

主要部分の調査は平成10年１月から着手したが、調査区の北側と西側は交通量の多い国道と県道に接している。また、東側は店舗とパチンコ店に接しており、調査区の一部はそれらへの進入路であるため、その調査には安全の確保にも細心の注意が必要であった。その点を考慮して、振興局、地元を含めて調査の工程と調査方法について協議した。店舗への進入路については３区画に分けて、順次調査埋め戻しを繰り返すことでそれを確保することにした。また、南端部も造園業者の植木，石製品置き場となっておりその進入についても考慮する必要があった。それらを考慮して調査区を設定し、北から１区、南端を６区とした。１区の表土掘削は調査着手までに行い、１区の排土は調査区外に確保し、その他の調査区の排土は調査終了した１区を排土場所とした。１月９日から調査を開始した。表土除去後の検出作業において、多くの方形区画と、それを取り囲む帯状のものを１区全体に検出した。この方形区画が瓦粘土採掘坑である。そして、採掘坑と採掘坑の間に存在する幅40～80㎝の帯状の部分が本来の地山層であることが判明した。そこで、この帯状に残る地山部分の遺構検出を行った。また、粘土採掘坑の下層に遺構が残存することを想定して、粘土採掘坑の掘り下げと、その底面における遺構の検出作業を実施した。調査の結果は、瓦粘土採掘坑により遺構は大きく削平されていた。残

存する部分も本来の遺構からすればごく一部分である。しかし、瓦粘土採掘坑からは多量の遺物が出土した。そのほとんどは弥生土器であり、本来はしっかりした弥生時代集落の一部であることが推測された。（井上）

平成９年（1997年）度発掘調査

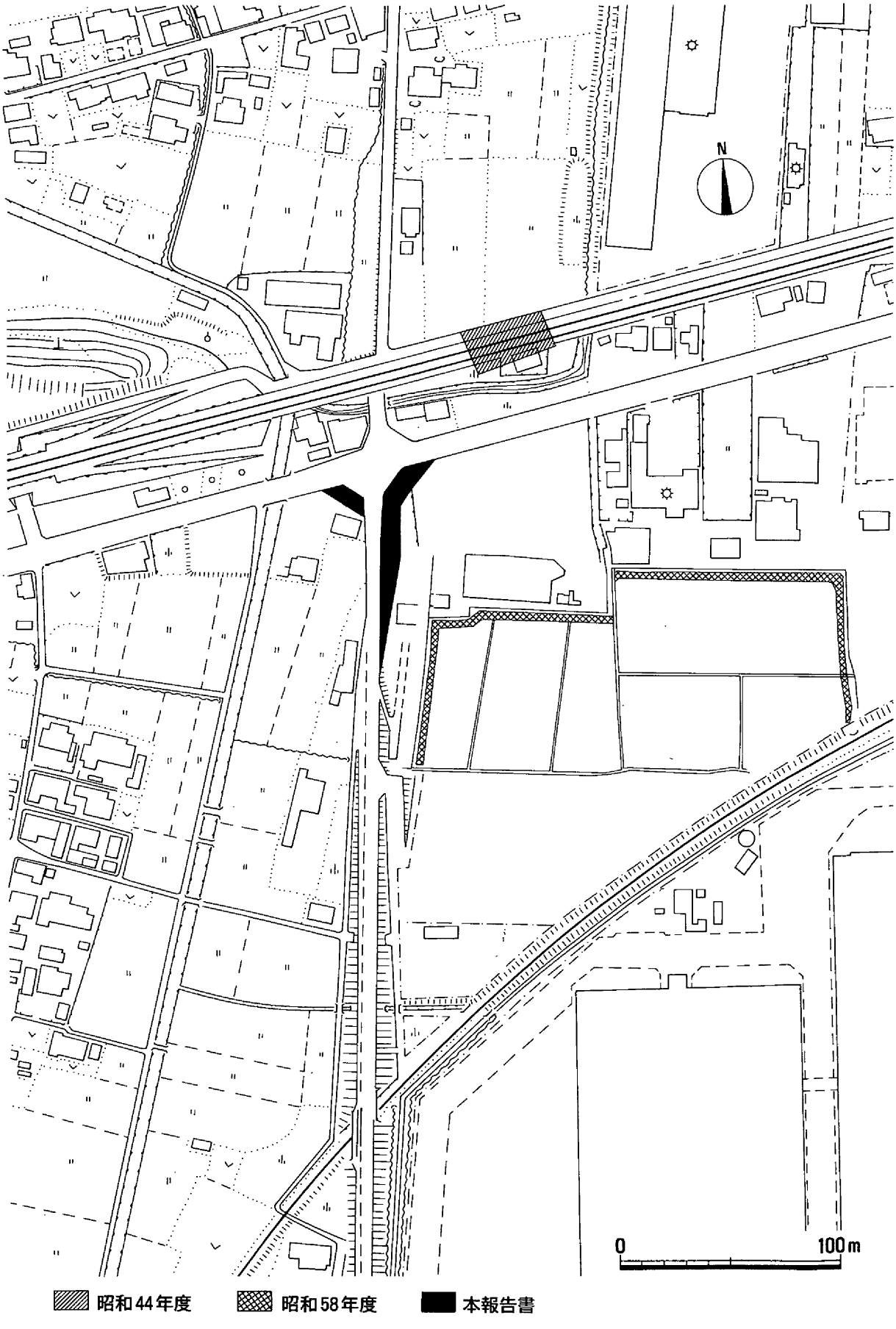
岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
岡山県教育庁文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　臼井　洋輔
課長代理　西山　猛
参　事　葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）
平井　勝
主　事　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　籔本　克之
次　長　正岡　睦夫
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）
井戸　丈二
主　査　木山　伸一
調査第一課
課　長　高畑　知功
課長補佐（第一係長）
江見　正己（確認調査担当）
文化財保護主事
岡本　泰典（確認調査担当）
調査第三課
課　長　柳瀬　昭彦
課長補佐（第二係長）
井上　弘（１次調査担当）
文化財保護主査
木原　義明（１次調査担当）
主　事　時實　奈歩（１次調査担当）

平成10年（1998年）度報告書作成

岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　平岩　武
岡山県教育庁文化課
課　長　髙田　朋香
課長代理　西山　猛
参　事　正岡　睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）
松本　和男
主　事　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　葛原　克人
次　長　大村　俊臣
総務課
課　長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）
安西　正則
主　査　山本　恭輔
調査第三課
課　長　柳瀬　昭彦
課長補佐（第三係長）
岡本　寛久
文化財保護主幹
平井　勝（報告書作成担当）

平成11年（1999年）度立会調査

岡山県教育委員会
教　育　長　黒瀬　定生
岡山県教育庁
教育次長　宮野　正司
岡山県教育庁文化課
課　長　松井　英治
課長代理　佐々部　和生
参　事　正岡　睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）
松本　和男（調査担当）
文化財保護主任
大橋　雅也（調査担当）
主　任　奥山　修司

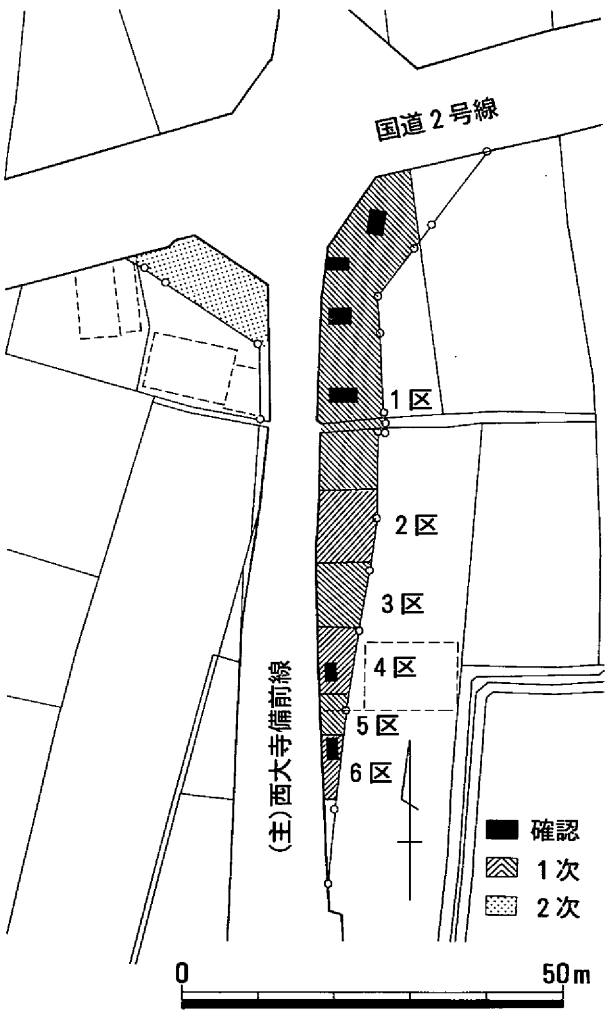


第２図　調査区位置と過去の調査区位置（1/2,500）

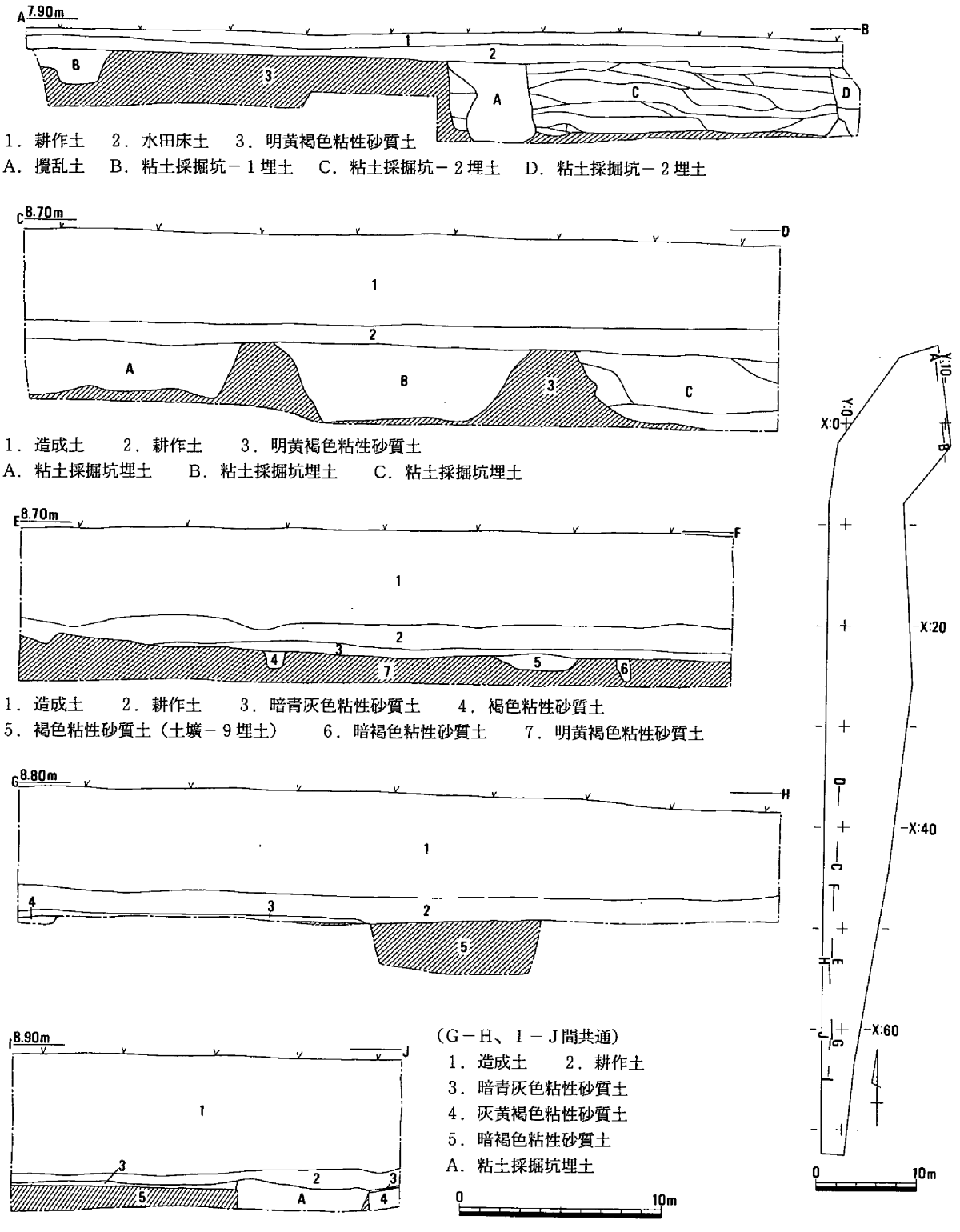
第３章　調査の概要

第１節　調査区の概要

１次調査の範囲内は、確認調査が実施されており、北半には瓦粘土採掘坑の存在が知られていた。調査の結果、２区と３区の境界までは明確に粘土採掘坑を検出した。３区から６区に関しては、一部に攪乱が見られるもののそれが瓦粘土採掘坑であるか否かについては調査区の幅が狭く確認は出来なかった。瓦粘土の採掘であるが、昭和の一時期に現在の国道２号線の北に数軒が操業し昭和30年代の半ば頃まで存在していたようである。粘土の採掘も国道より北での採掘は殆ど無く、南側に広く採掘場所が広がっていたようである。この瓦粘土採掘坑からの出土遺物は、その殆どが弥生土器であるが、その中に少量の近現代と観られる磁器や瓦片が含まれている。瓦粘土採掘坑は、一辺が2.5～3ｍを基準として、一部で重なる所も見られるが、狭いところで約40cm、広いところで80cmの間をおいて計画的に採掘されている様子がうかがえる。今回の調査では、40～80cmの帯状に残る部分を中心に遺構の検出を行った。そのため、特に１区では土壙についてはある程度その形状は把握できたが、溝については難しいものがあった。土壙－２は帯状に残る部分にその中心部が存在するため、残存状況も比較的良好であった。土壙－１・４は土壙の壁体部分の一部が帯状に残存する地山部分にかかるものであり、底面は粘土採掘坑の埋土の下層に検出した。土壙－３は、粘土採掘坑の下層に検出したもので、辛うじて底面が残存していた。土壙－６・７・８はその一部を検出したのみで、その殆どは粘土採掘坑により削平されているためにその規模については全く不明である。土壙－10・11については唯一全体の規模の判明する遺構である。竪穴住居－１は２区の南東端において検出した。壁体溝と中央穴を確認したが、柱穴は検出されなかった。５区においては、柱穴状の小ピットを検出したが、建物などに組み合わせられる状況は見られなかった。６区は、調査区の幅が狭く調査面積が狭小であるため暗褐色粘性砂質土の遺物包含層



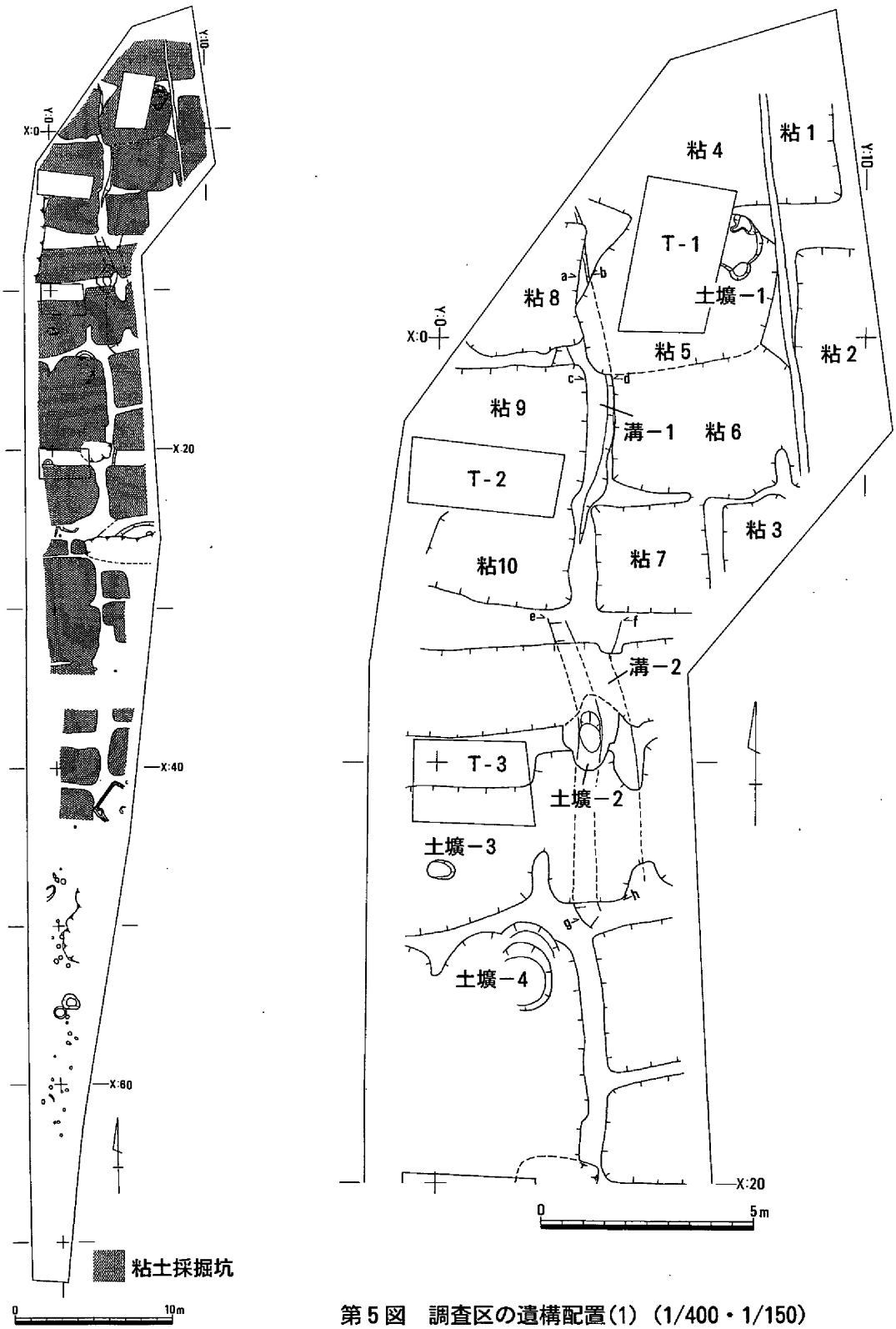
第３図　調査区の位置（1/500）



第４図　調査区の土層断面（1/300・1/600）

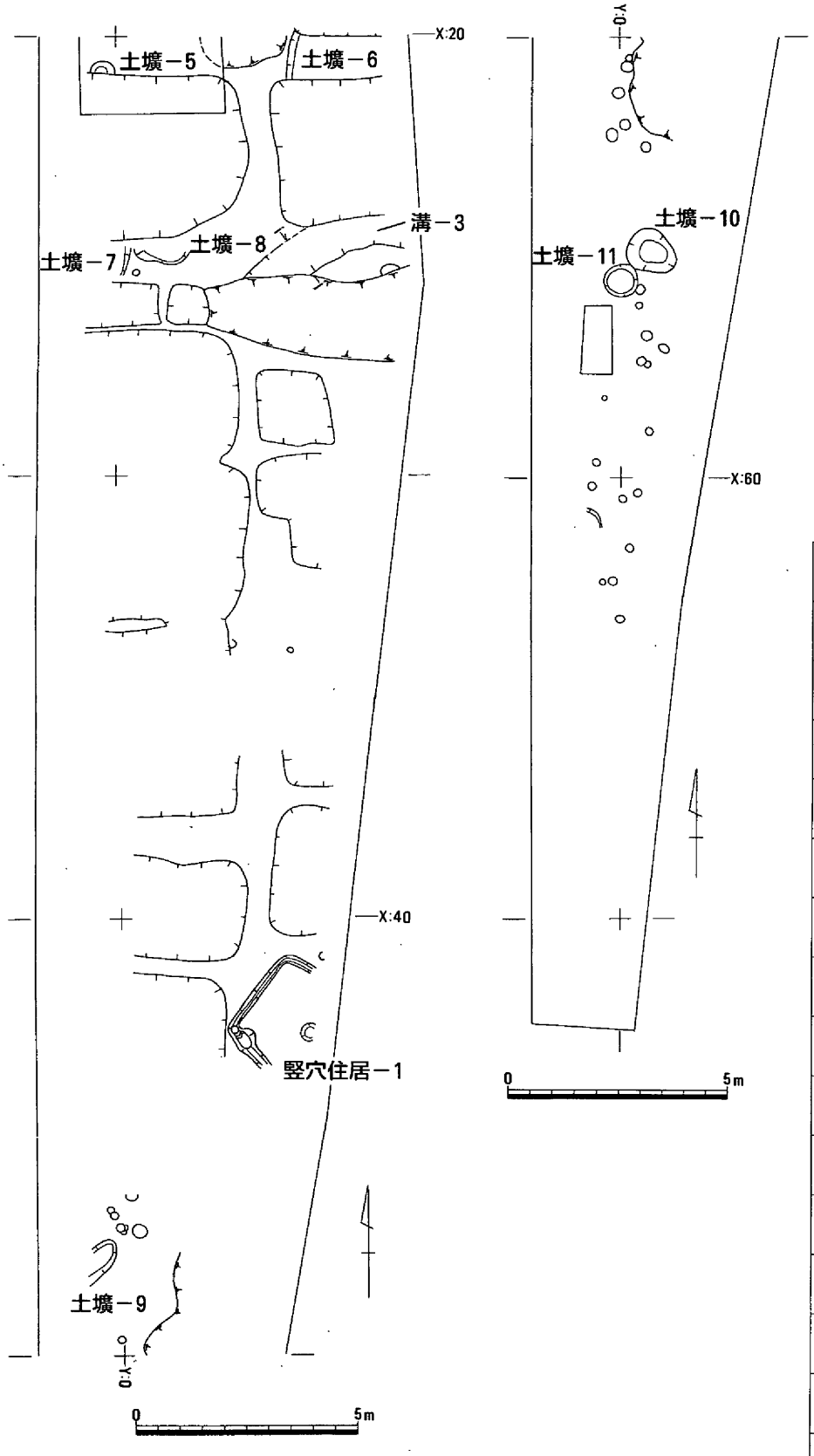
は確認したが遺構は検出されなかった。

遺物のそのほとんどは弥生土器である。時期的には弥生時代中期の前半を中心とするもので、少量の縄文土器、近現代の磁器などが出土している。土壙－２・10・11などの遺構に伴う土器もあるが、出土量の全体からすればその大半は瓦粘土採掘坑からの出土である。瓦粘土採掘に従事した経験のあ



第５図　調査区の遺構配置(1)（1/400・1/150）

る人からの聞き取りによると、粘土以外は石と同様に不純物であり掘り上げられた採掘坑に埋め戻したとのことである。そのことは、出土した遺物は本来の場所から大きくは移動していない可能性があり、今回出土した遺物は、調査区と大きく離れていない状況を示すものといえる。出土した弥生土器の量からすれば、遺構の比較的集中する遺跡を推測させるものがある。　（井上）



第６図　調査区の遺構配置(2)（1/150）

新旧遺構名対照表

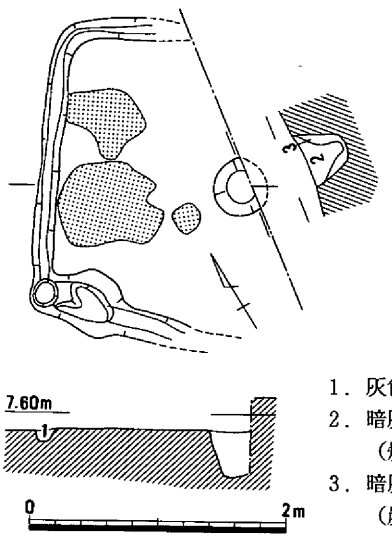
報　告　書	調 査 時
竪穴住居－1	No.15
土 壙 － 1	No. 2
土 壙 － 2	No. 5
土 壙 － 3	No. 6
土 壙 － 4	No. 7
土 壙 － 5	No. 4
土 壙 － 6	No. 8
土 壙 － 7	No.10
土 壙 － 8	No. 9
土 壙 － 9	No.12
土 壙 － 10	No.14
土 壙 － 11	No.13
溝　－　1	No. 1
溝　－　2	No. 3
溝　－　3	No.11
粘土採掘坑は報告書と調査時の名称が同じ	

第２節　１次調査の遺構と遺物

１．竪穴住居

竪穴住居－１（第７図、図版２－１）

調査区の東端に位置し、東側半分は調査区外に延びる。全辺を検出した西辺は、一辺230cmを測り、小規模の長方形を呈すると考えられる竪穴住居である。幅15cm～24cm、深さ10cmの壁体溝が巡り、西隅の一部でやや広がっている。直径45cm、深さ35cmの中央穴を有しており、埋土には多量の焼土塊と炭片を含んでいる。柱穴は西隅の壁体溝中に一つあるが、住居に伴わないと考えられる。床面上には３か所の被熱痕跡があり、床面から２～３cmの深さまで被熱による変色をしている。出土遺物はない。時期は埋土及び周辺の遺構の状況から、弥生時代中期のものであると考えている。



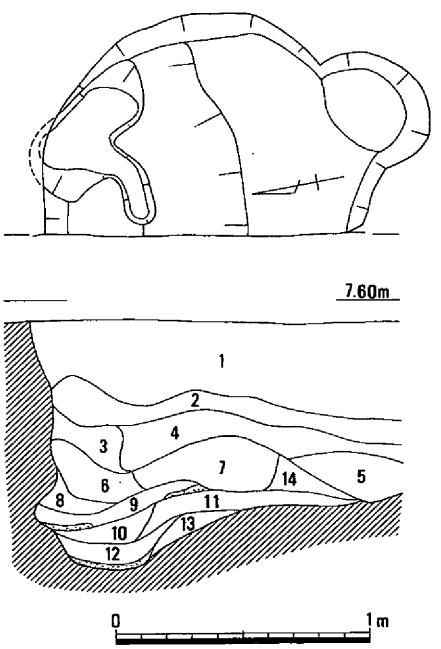
１．灰色粘性砂質土
２．暗灰色粘性砂質土
（焼土塊多量に含む）
３．暗灰褐色粘性砂質土
（炭、地山土少し含む）

第７図　竪穴住居－１（1/60）

２．土壙

土壙－１（第８図、図版２－２・３）

調査区の北に位置し、粘土採掘坑－５の下層で検出した不整円形を呈する土壙である。西側半分は確認調査時のトレンチによって、上半は粘土採掘坑によって切られている。（土層断面図の第１層～第５層は粘土採掘坑の埋土である。）底面は北側に向かって深くなっており、一番深いところで検出面から52cmを測る。埋土には焼土塊、炭を多く含んでおり、底面からは特に多くの炭を検出している。土器は出土していないが、時期は埋土や周辺の状況から弥生時代中期の遺構であると考えられる。

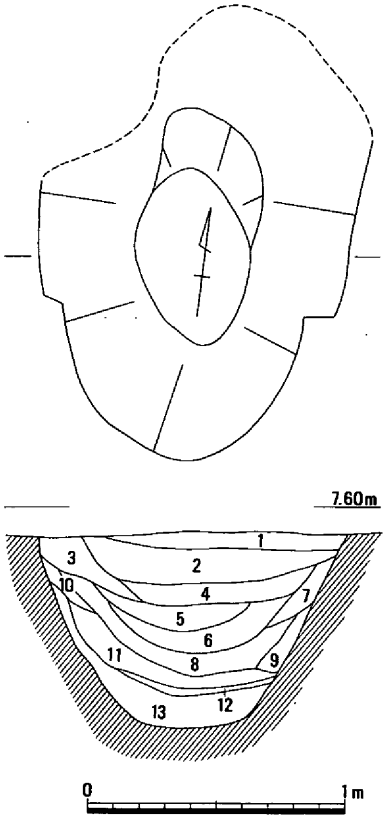


１～５．粘土採掘坑－５埋土
６．淡黄褐色粘性砂質土
（焼土塊を含む）
７．暗黄褐色粘性砂質土
（焼土を僅かに含む）
８．暗灰褐色粘性砂質土
（焼土を含む）
９．暗茶褐色粘性砂質土
（炭、焼土を多く含む）
10．茶褐色粘性砂質土
（焼土塊を含む）
11．明赤褐色粘性砂質土
（焼土層）
12．暗茶褐色粘性砂質土
（焼土、炭を多く含む）
13．暗茶褐色粘性砂質土
（焼土、炭を含む）
14．暗黄褐色粘性砂質土
（焼土を僅かに含む）

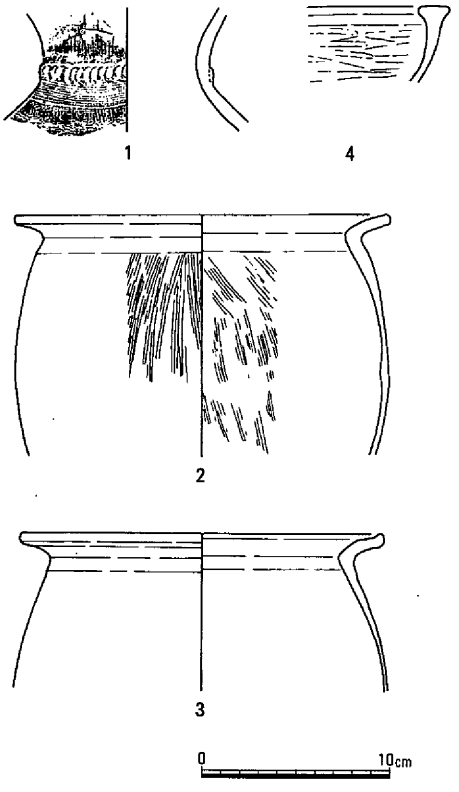
第８図　土壙－１（1/30）

土壙－２（第９図、図版２－４・５、４－１）

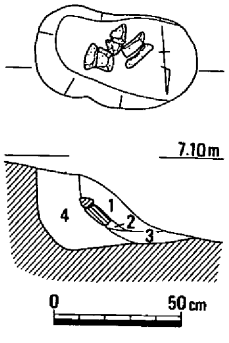
調査区の北側で検出した、楕円形を呈すると考えられる土壙である。底面は北側に一段、テラス状に高くなるものの浅いレンズ状を呈しており、検出面からの深さは78cmを測る。出土遺物には壺１、



1．暗灰色粘性砂質土
2．褐色粘性砂質土
3．暗灰褐色粘性砂質土
4．明褐色粘性砂質土
（地山土混じる）
5．褐灰色粘性砂質土
6．黄褐色粘性砂質土
（地山土混じる）
7．灰褐色粘性砂質土
（炭を少量含む）
8．暗茶褐色粘性砂質土
（炭、骨片を多く含む）
9．褐色粘性砂質土
（炭を少量含む）
10．暗褐色粘性砂質土
11．暗灰褐色粘性砂質土
（炭、骨片を多く含む）
12．茶褐色粘質土
13．灰色粘質土
（グライ化している）



第９図　土壙－２（1/30）・出土遺物



1．暗黄褐色粘性砂質土
2．暗灰褐色粘質土
（焼土、炭が混じる）
3．褐色粘性砂質土
（焼土、炭が混じる）
4．黄褐色粘性砂質土
（僅かに焼土混じる）

第10図　土壙－３（1/30）

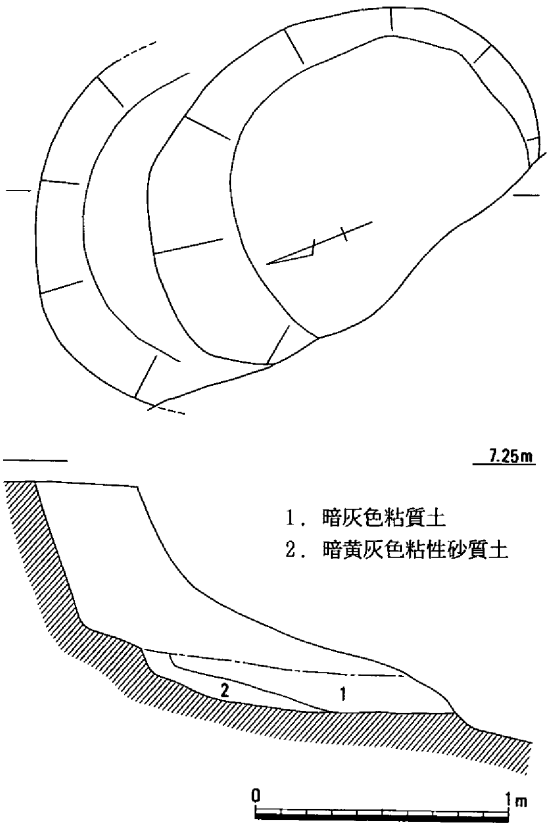
甕２・３、鉢４がある。１は頸部に指頭圧痕文突帯を施し、その下に平行櫛描文と波状櫛描文を施している。２は内外面をハケメ調整している。４は鉢の口縁部である。内外面を横方向にヘラミガキを行っている。遺物には時期差が認められるが、２が一番新しく、弥生時代中期中葉のものと考えられる。このほか、埋土を水洗した際に多くの魚と思われる骨の小片が出土した。出土遺物から、この土壙は弥生時代中期中葉の時期であると考えられる。

土壙－３（第10図、図版３－１）

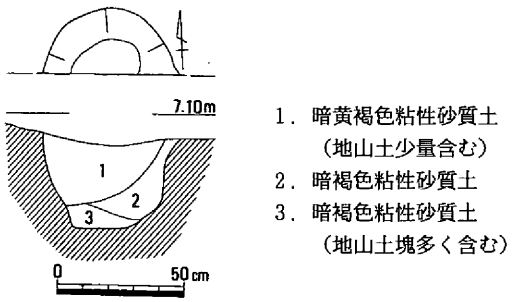
調査区の北西に位置している隅丸方形の土壙である。粘土採掘坑によって、西側を切られている。長径63cm、短径36cm、一番深いところで検出面から33cmを測る。第２層に焼土塊を多く含んでいるものの、他に出土遺物は無い。この焼土塊は、土壙－１のものと類似しているが、土壙の壁面や底面が火を受けている痕跡は見受けられないことから、廃棄土壙の可能性を考えている。周囲の遺構の状況から、時期は弥生時代中期であると考えられる。

土壙－４（第11図、図版４－１）

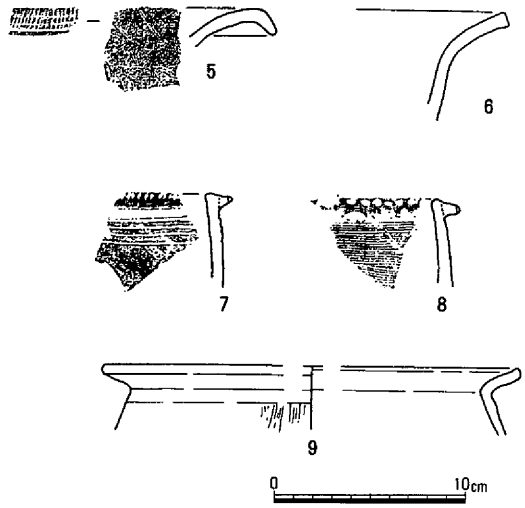
調査区の中央部北よりで検出した、楕円形を呈すると考えられる土壙である。粘土採掘坑によって南側を削平されている。長径200cm、短径120cmを測り、検出面からの深さは90cmを測る。底面は途中に段が付いているが、ほぼ平らである。出土遺物としては、壺５・６、甕７・８・９がある。壺５は口縁端部に３条の沈線と刻目文を施す。口縁部は下方にのび、頸部との境が明瞭である。７・８は、



第11図　土壙－４（1/30）・出土遺物



第12図　土壙－５（1/30）



７にヘラ描沈線文が、８に平行櫛描文が施されている。７など一部、弥生前期後葉の土器を含むものの、この土壙の時期は弥生時代中期でも中葉に位置すると考えられる。

土壙－５（第12図）

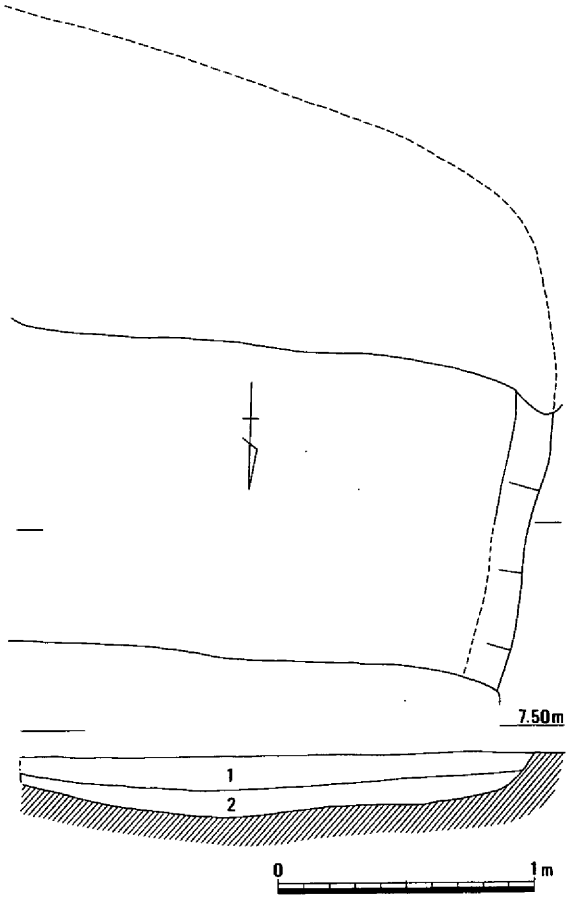
調査区の中央西側で検出された土壙である。南側を粘土採掘坑によって切られているため、形態は円形または楕円形を呈すると考えられる。残存部分で幅55cm、深さ37cmを測る。出土遺物はないが、周辺の遺構や埋土の状況から、弥生時代中期の遺構であると考えられる。

土壙－６（第13図、図版４－３・５－１）

調査区の中央部東側で検出した土壙である。東側以外は粘土採掘坑および調査区によって切られているため形態などは不明である。規模は残存部で210cm×110cmを測るが、東壁面の観察から本来の規模は幅260cm以上である。深さは検出面から23cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。出土遺物は壺**10**・**11**、甕**12**～**17**がある。**10**は摩滅が著しいが、外面に８条を１単位とする平行櫛描文が２条施されており、内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。**11**は体部と考えられ、平行櫛描文と波状櫛描文を交互に配置する。**12**～**15**は逆「Ｌ」字状の貼付口縁で、平行櫛描文とその下に三角形か円形の刺突文、または波状櫛描文を施している。**15**は口縁部上端面に２列の三角形刺突文を配している。**16**はヘラ描沈線文を施す。出土遺物は、弥生時代前期後葉から中期前葉までの時期幅を持つことから、この土壙の時期は弥生時代中期前葉であると考えられる。

土壙－７（第14図、図版３－２）

調査区の中央部西側、土壙－８の東隣で検出した土壙である。北側は粘土採掘坑によって切られているが、不整円形を呈すると考えられる。残存する遺構の規模は幅120cmを測り、断面は皿状を呈している。深さは検出面から21cmを測り、埋土には礫を含んでいた。遺物は出土していないが、埋土や



1．暗褐色粘性砂質土
2．暗灰色粘性砂質土

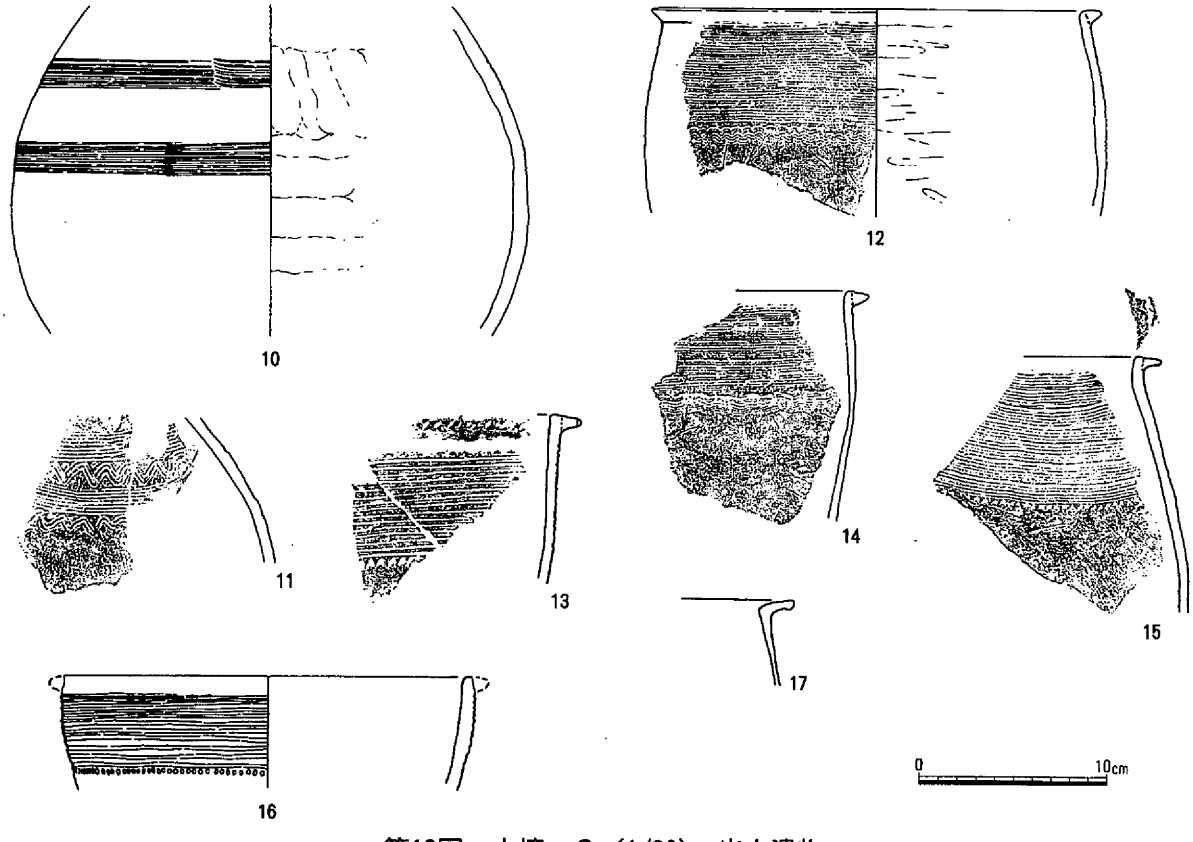
周辺の状況から時期は弥生時代中期と考えられる。

土壙－８（第14図、図版３－２）

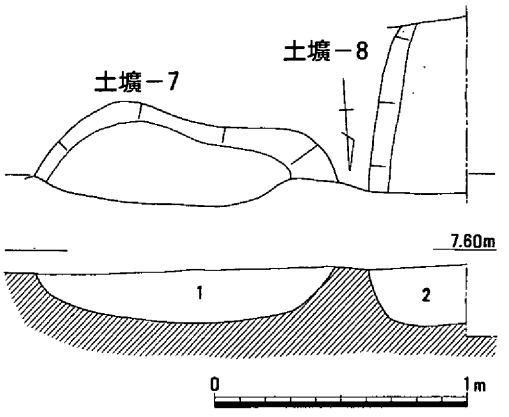
調査区の中央部西側、土壙－７の西隣りに位置している。南北を粘土採掘坑に、西側を調査区によって切られているため全体の形状は不明である。残存部分での規模は幅70cm、深さ23cmである。遺物は出土していない。周辺の状況から、弥生時代中期の時期であると考えられる。

土壙－９（第15図）

調査区の南側、竪穴住居－１の南西に位置している。西側を調査区によって切られているが、本来は楕円形を呈するものと考えられる。残存する規模は幅62cmで、深さは18cmを測る。出土遺物は無いが、埋土などから弥生

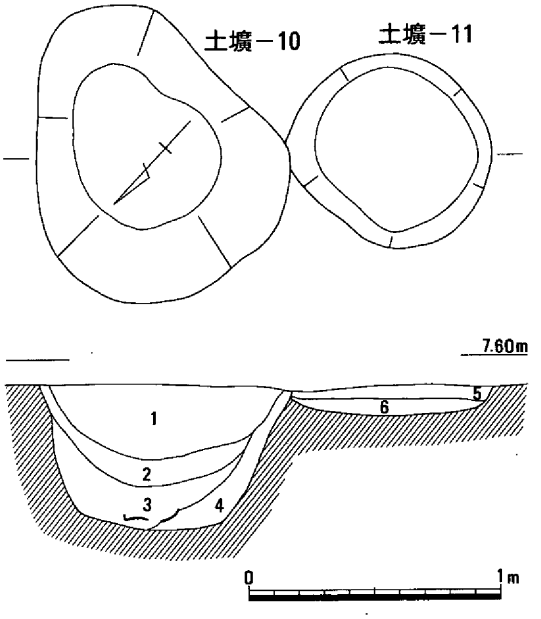


第13図　土壙－６（1/30）・出土遺物



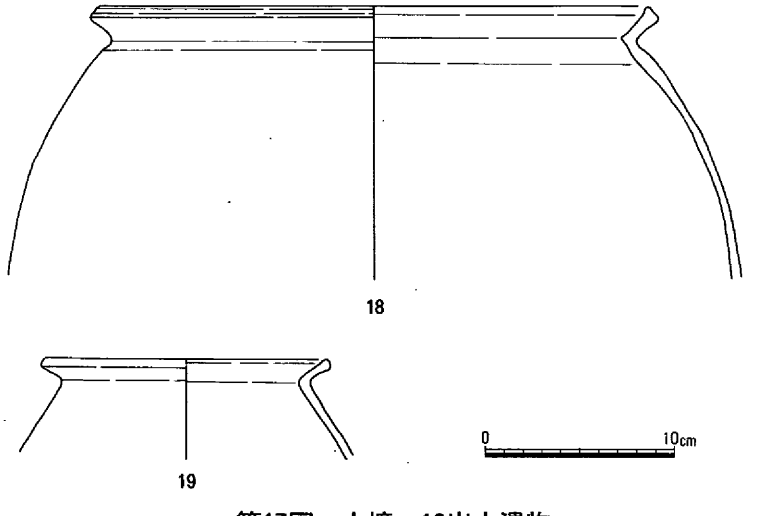
1．暗褐色粘性砂質土
（礫を含む）
2．暗褐色粘性砂質土

第14図　土壙－７・８（1/30）

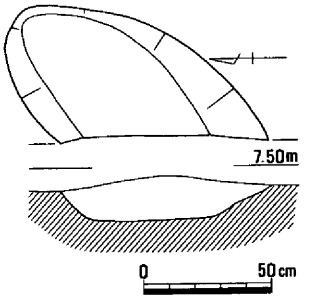


1．褐色粘性砂質土
（炭を少量含む）
2．明褐色粘性砂質土
（炭を少量含む）
3．暗褐色粘性砂質土
（炭を多く含む）
4．暗灰褐色粘性砂質土
（炭を少量含む）
5．灰褐色粘性砂質土
6．褐色粘性砂質土
（明黄褐色粘性砂質土塊を含む）

第16図　土壙－10・11（1/30）



第17図　土壙－10出土遺物



第15図　土壙－９（1/30）

時代中期の遺構であると考えられる。

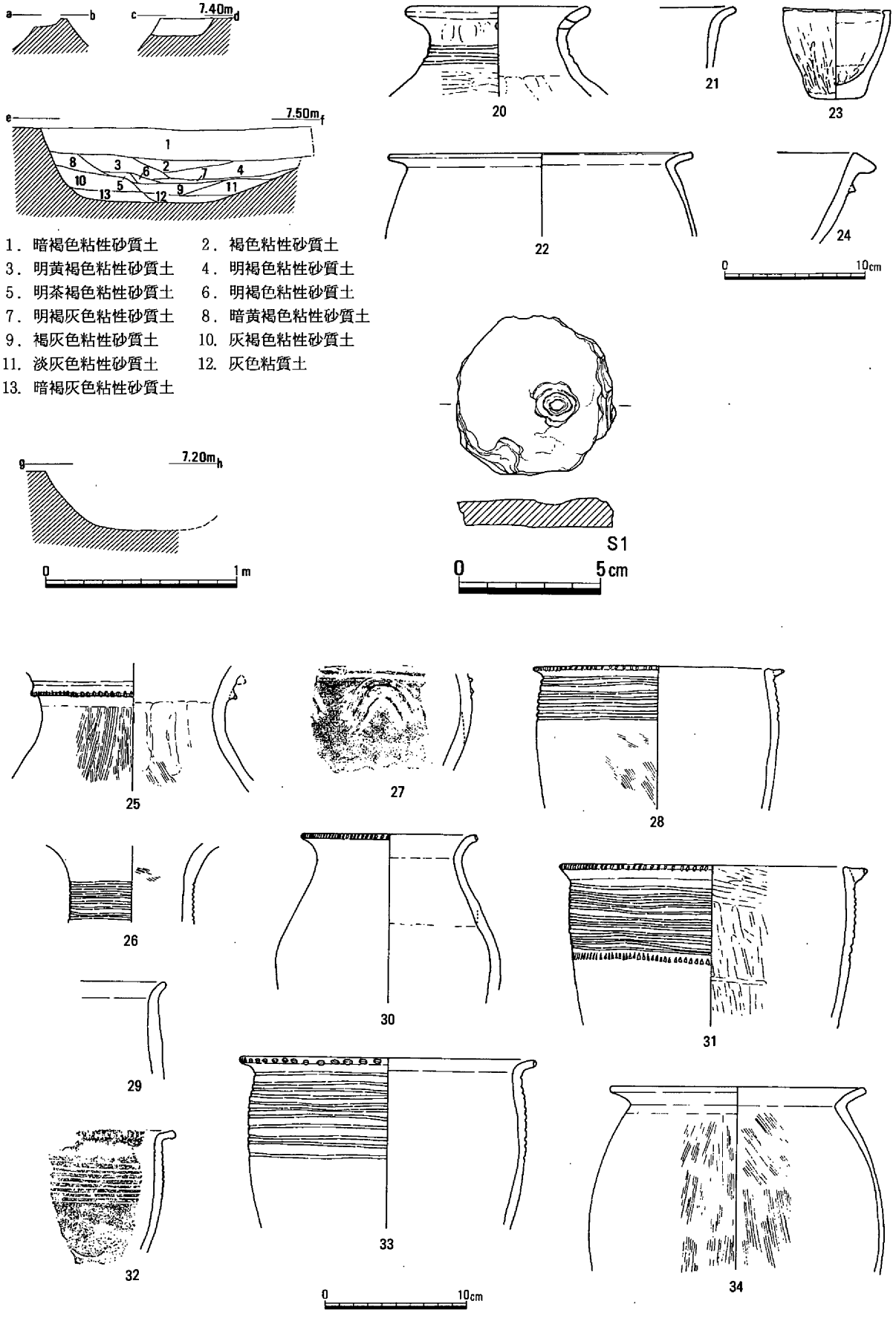
土壙－10

（第16・17図、図版５－２）

調査区の南側、中央部に位置し、土壙－11の南東端を切っている。形態は不整円形を呈するもので、規模は長径120㎝、短径85㎝、深さは検出面から57㎝を測る。遺物は底面近くの第３層から出土しており、甕**18**・**19**の２点である。**18**は口径28.8㎝を測る大形のものである。口縁端部は強いナデによって稜がついている。**19**は内面にはわずかにハケメ調整が見られる。これらの出土遺物から、この土壙の時期は弥生時代中期中葉であると考えられる。

土壙－11（第16図）

調査区の南側に位置し、土壙－10に隣接している。形態は不整円形を呈し、規模は長径78㎝、短径70㎝、深さは12㎝を測る。出土遺物は無いが、土壙－10に切られていることから、弥生時代中期中葉以前であり、かつ埋土の状況から中期の範疇に入る時期であると考えられる。



第18図　溝－１・２（1/30）・出土遺物

３．溝

溝－１（第18図、図版３－３・６－１）

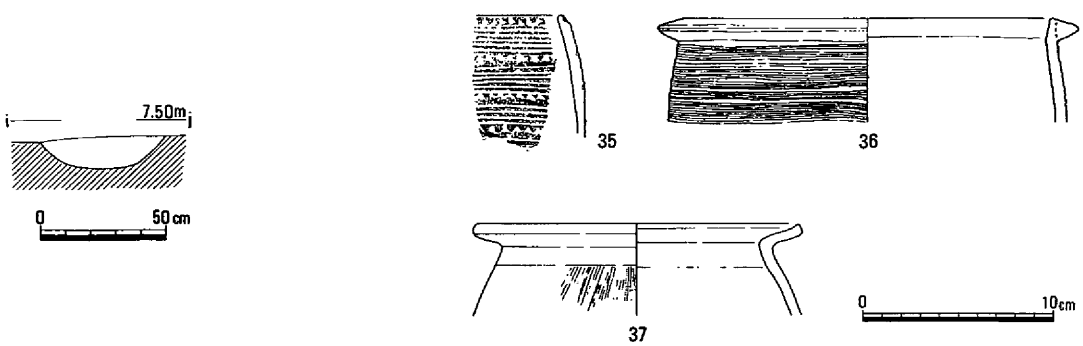
調査区の北側に位置しているが、大部分を粘土採掘坑によって削平されている。検出できた範囲では、南北方向の溝で検出長790㎝、幅150㎝、深さ10㎝である。出土遺物には壺**20**、甕**22**、鉢**21**・**23**・**24**、石製円盤Ｓ１などがある。**20**は頸部に３条のヘラ描沈線文を持ち、口縁部には穿孔がある。**22**は体部内面の調整がヘラミガキである。**21**は如意状口縁を呈すものである。**23**は小形の鉢で外面をヘラミガキ調整している。**24**は口縁部が外方に開き、口縁部下には１条の貼付突帯文が巡る。Ｓ１は片面から敲打によって孔を開けようとした痕跡があることから、紡錘車の未製品である可能性もある。溝－１は断面の観察から溝－２の埋没後に掘削されたと考えられ、出土遺物には前期後葉のものを含むが、この溝の時期は弥生時代中期中葉であると考えられる。

溝－２（第18図、図版６－２・７－１）

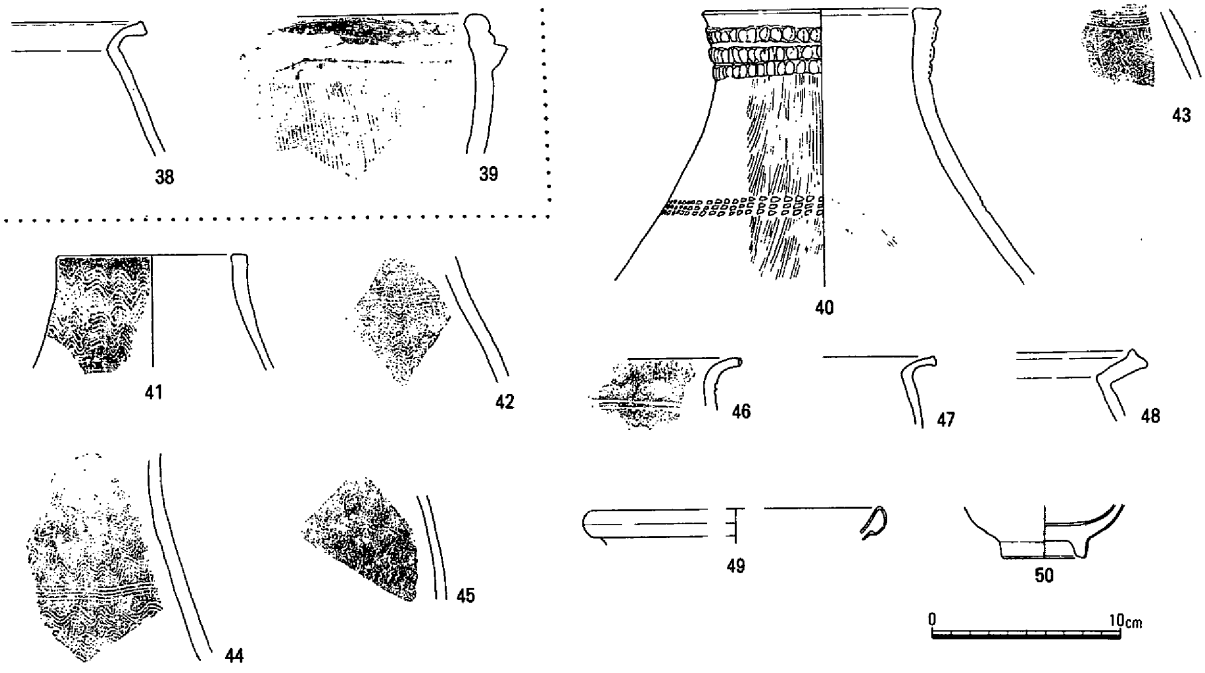
調査区の中央部北寄りに位置している南北方向の溝である。大部分を粘土採掘坑によって削平されており、東側の肩は調査区外に延びることから規模ははっきりとはわからない。残存している部分で検出長750㎝、幅140㎝、深さは45㎝を測るものである。出土遺物には壺**25**～**27**・**30**、甕**28**・**31**～**34**、鉢**29**がある。**25**は頸部の貼付突帯文上に刻目文を施している。**26**は頸部にはヘラ描沈線文が巡る。**27**は外面に貼付突帯文で２条の直線文と弧文を施している。**30**は口縁部に刻目文を持つが、その他の調整などは不明瞭である。**28**・**31**～**33**は口縁部下にヘラ描沈線文を施すものであるが、**28**・**31**は逆「Ｌ」字状の貼付口縁で、**32**・**33**は如意状口縁である。また、**31**はヘラ描沈線文の下に三角形刺突文を施し、**33**は口縁端部に円形刺突文を施している。**34**は内外面ハケメ調整の「く」の字口縁の甕である。**29**は口縁部で、ナデ調整である。この溝は土壙－２と溝－１によって切られていることから、弥生中期中葉以前にはすでに埋没していたと考えられる。また、掘削された時期は遺物から弥生前期後葉である可能性が考えられる。

溝－３（第19図、図版７－２）

調査区中央部東側に位置している東西方向の溝である。検出した部分での規模は長さ340㎝、幅90㎝、深さ30㎝である。出土遺物は壺**35**、甕**36**・**37**がある。**35**は口縁部直下から三角形刺突文を連続させたものとヘラ描沈線文を交互に配している。**36**は平行櫛描文を施す、逆「Ｌ」字状の貼付口縁を持つ甕で、**37**は内面の調整は不明瞭ながらハケメ調整かと見られる。**35**など弥生前期後葉の土器が出土しているが、**37**の甕や埋土から弥生時代中期中葉の遺構であると考えている。



第19図　溝－３（1/30）・出土遺物



第20図　粘土採掘坑－１・２出土遺物

４．粘土採掘坑

粘土採掘坑は、周辺の聞き取りを行ったところ、昭和の始めから30年代まで行われた瓦粘土の採掘坑であることがわかった。方形に、東西南北の辺を揃えるように粘土の採取を行っている。このため遺構の検出は限られたが、埋め戻された土器から周辺に存在したであろう遺構が推察される。

粘土採掘坑－１・２出土遺物（第20図、図版８－１）

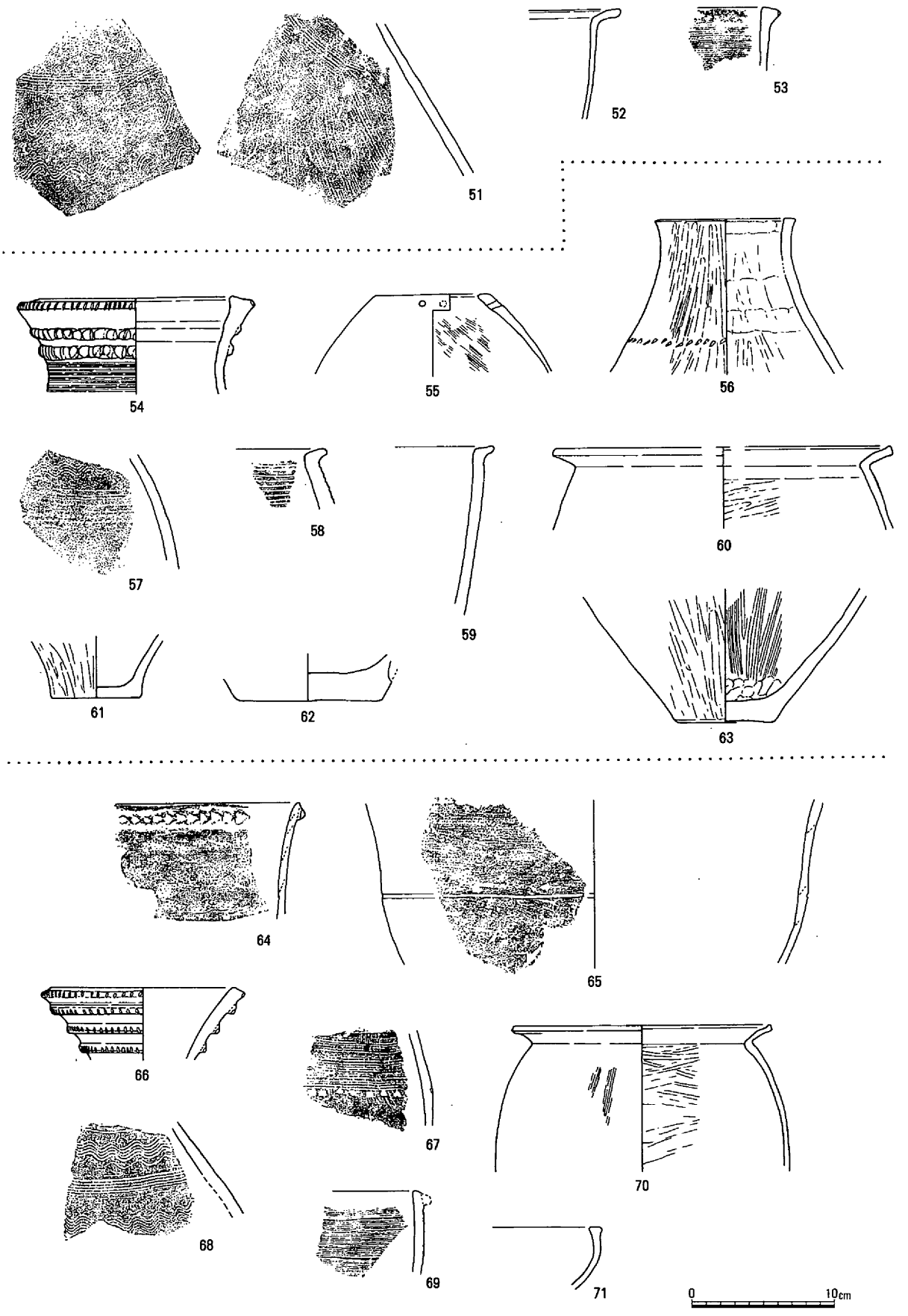
弥生土器、中・近世の陶磁器が出土している。弥生土器は壺**40**～**45**、甕**38**・**46**～**48**がある。**40**は口縁部に３条の指頭圧痕文突帯と胴部に刺突文を施す。**41**は口縁部直下に波状文を施す。**42**～**45**は体部に櫛描沈線や櫛描波状文を施している。**46**は如意状口縁を持ち、２条のヘラ描沈線を持つ。**38**・**47**は「く」の字状口縁、**48**は「く」の字状口縁で口縁端部が肥厚している。**46**は弥生時代前期後葉、その他の弥生土器は中期前葉～中葉の時期である。**49**・**50**は白磁の椀である。**49**は玉縁状口縁を持つ。**39**は備前焼の擂鉢で、口縁部下端が拡張しており18世紀代と考えられる。

粘土採掘坑－４・５・６出土遺物（第21図、図版８－１）

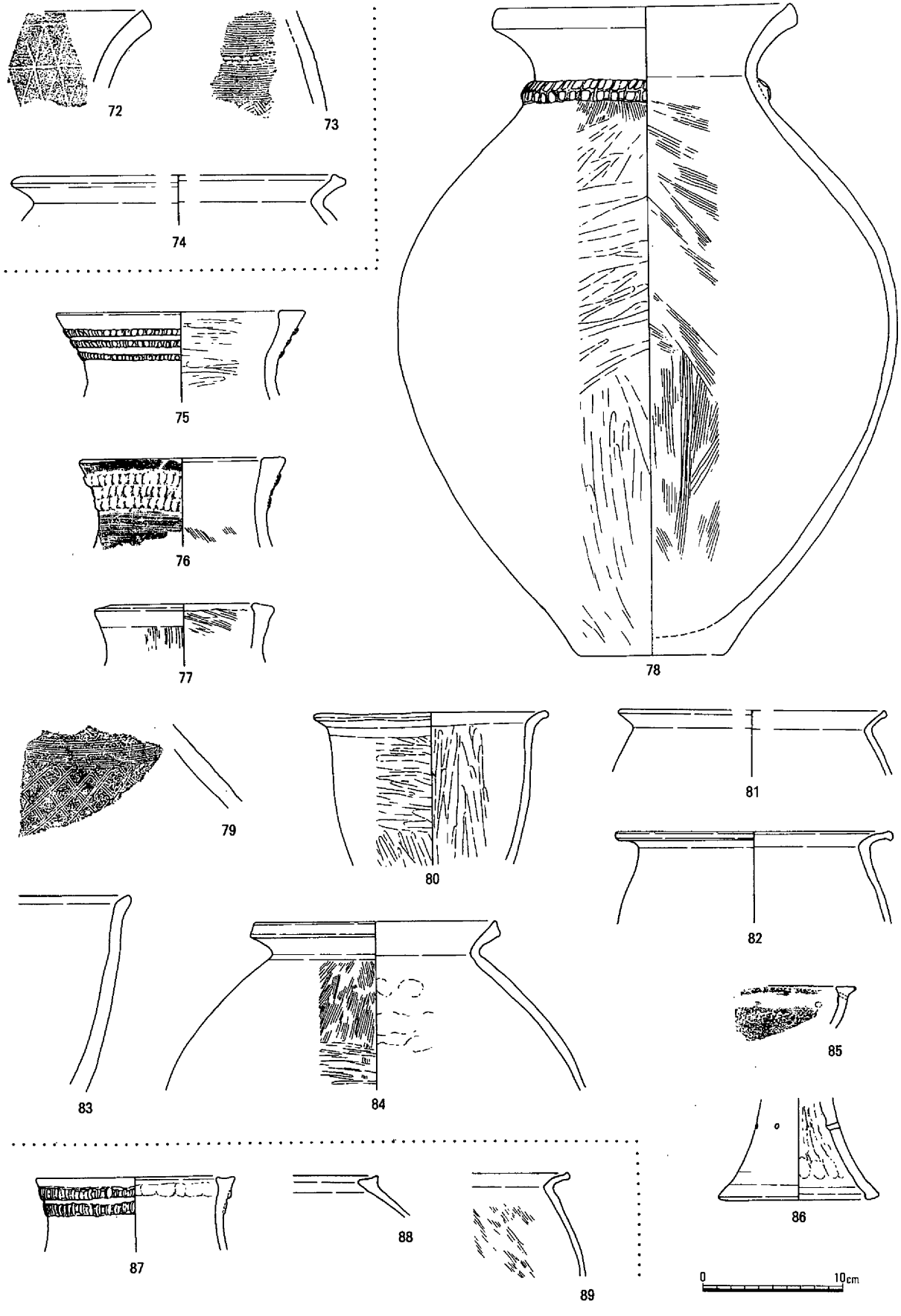
縄文土器、弥生土器が出土している。縄文土器**64**・**65**は深鉢で、晩期の沢田式期のものと考えられる。弥生土器は壺**51**・**54**～**57**・**66**・**68**、甕**52**・**53**・**58**～**63**・**67**・**69**・**70**、高杯**71**がある。**54**は２条の指頭圧痕文突帯と口縁端部に刻目文と頸部に平行櫛描文を施している。**55**は２個一対の穿孔を施す。**56**は体部に刺突文が巡る。**66**は３条の貼付突帯と口縁端部に刻目文を施し、口縁部は外反する。**51**・**57**・**68**など体部外面に平行櫛描文や波状櫛描文、刺突文を施す壺の体部も出土している。甕はヘラ描沈線を持つ**58**や、平行櫛描文を持つ**53**・**67**・**69**がある。**60**・**70**は「く」の字状口縁を持ち、内面はヨコミガキを施す。時期は、弥生時代前葉～中葉に収まると考えられる。

粘土採掘坑－７・８・９出土遺物（第22図、図版８－１）

弥生土器が出土している。壺**73**・**75**～**79**・**87**・**88**、甕**74**・**81**・**82**・**84**・**89**、高杯**86**、鉢**80**・**83**・**85**、器台**72**がある。**73**は平行櫛描文と刺突文、山形文を体部外面に施す。**78**は頸部に指頭圧痕文突帯を施



第21図　粘土採掘坑－４・５・６出土遺物

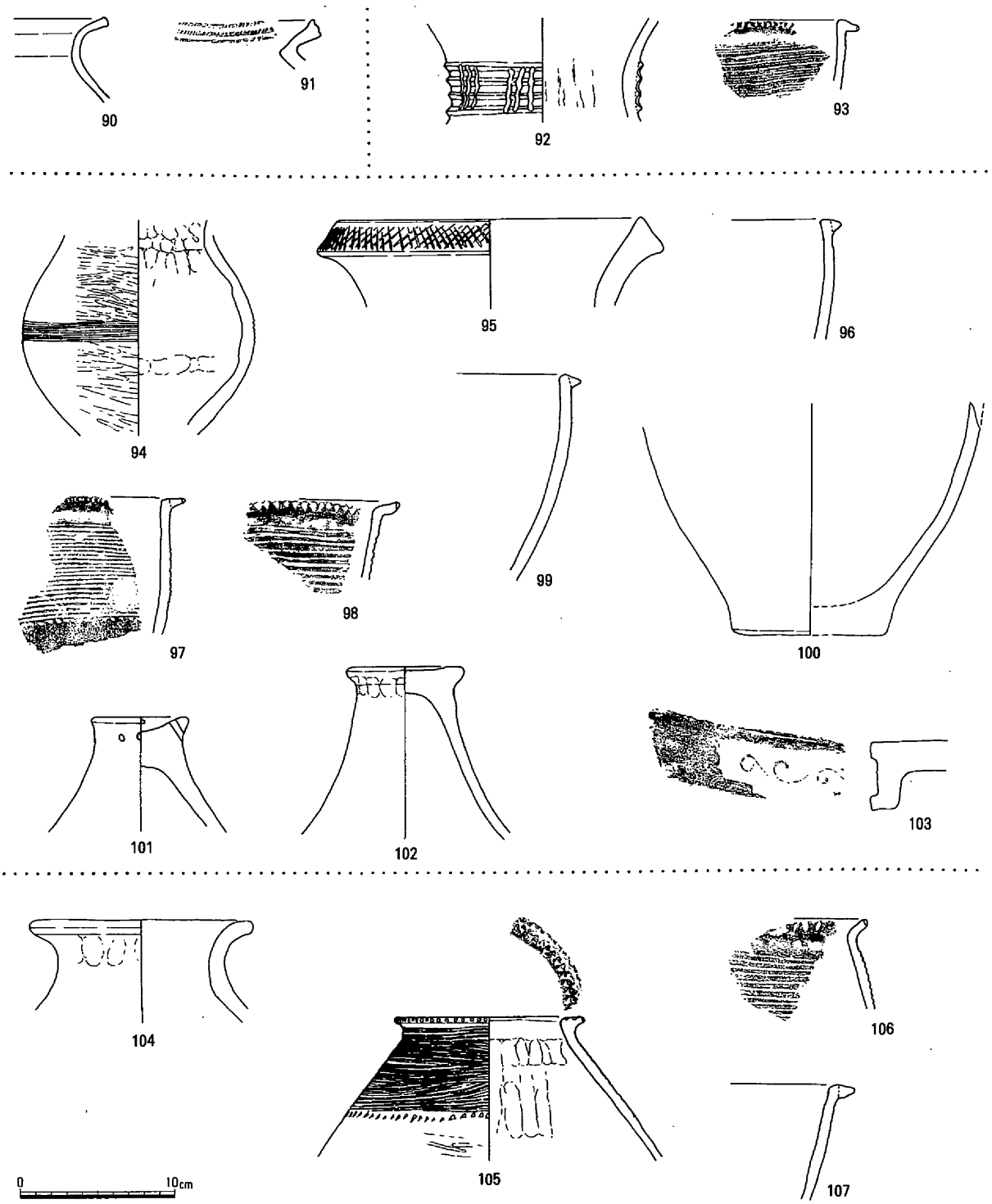


第22図　粘土採掘坑－７・８・９出土遺物

している。75・76・87は口縁部に指頭圧痕文突帯を施す。79は体部外面に平行櫛描文と斜格子文を施している。甕は「く」の字に外反した口縁を持つ74・81・82・89がある。また、80・83は如意状口縁を持つ。80は内外面を丁寧にヘラミガキ調整している。72は口縁部内面にヘラ描沈線文で三角形を描く。これらの土器の時期は80・83は弥生時代前期後葉、その他は中期前葉～中葉と考えられる。

粘土採掘坑－10・11・12・13出土遺物（第23図、図版８－１）

弥生土器、瓦がある。弥生土器は壺90・92・94・95・100・104・105、甕91・93・96～99・106・107、

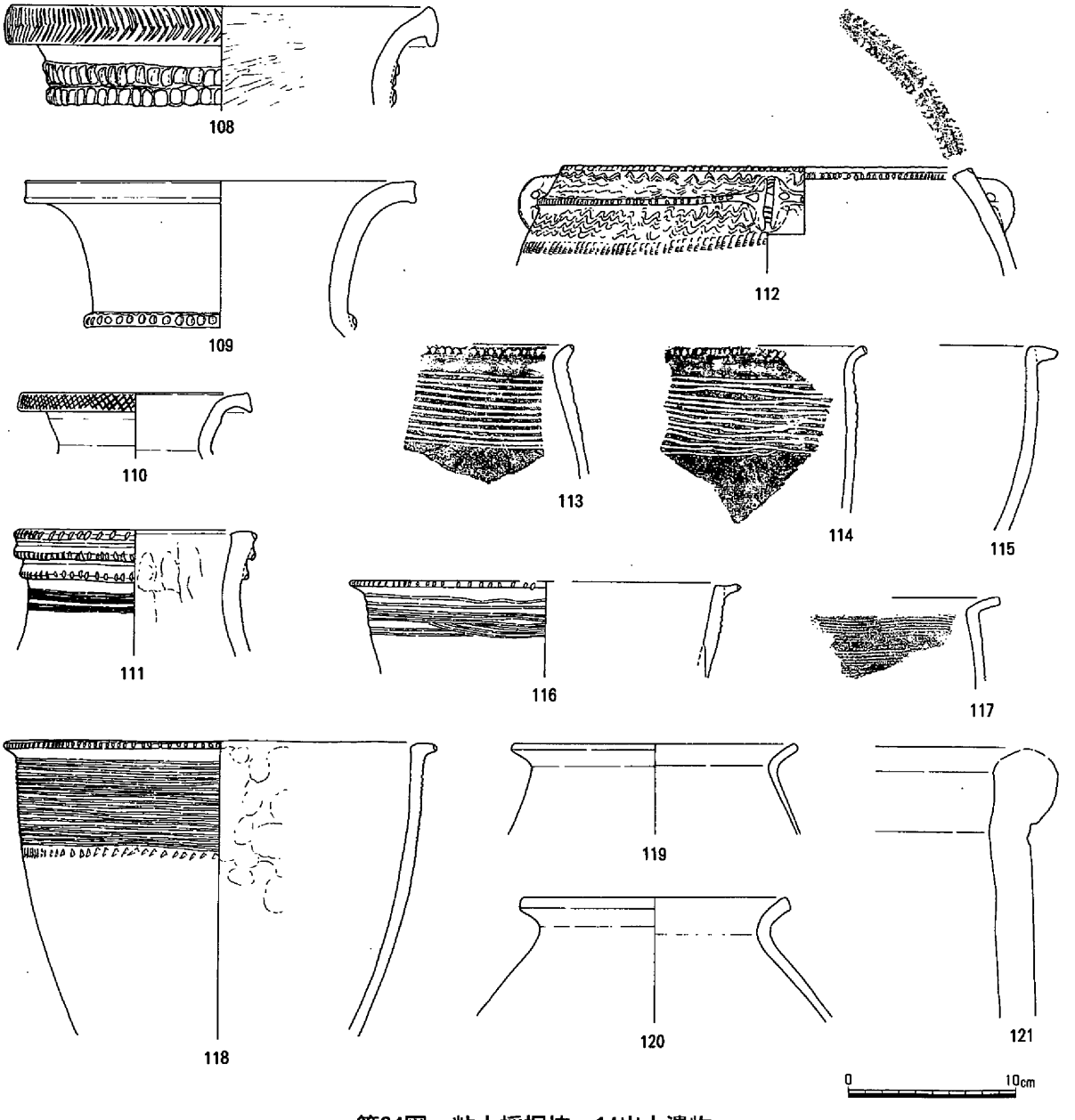


第23図　粘土採掘坑－10・11・12・13出土遺物

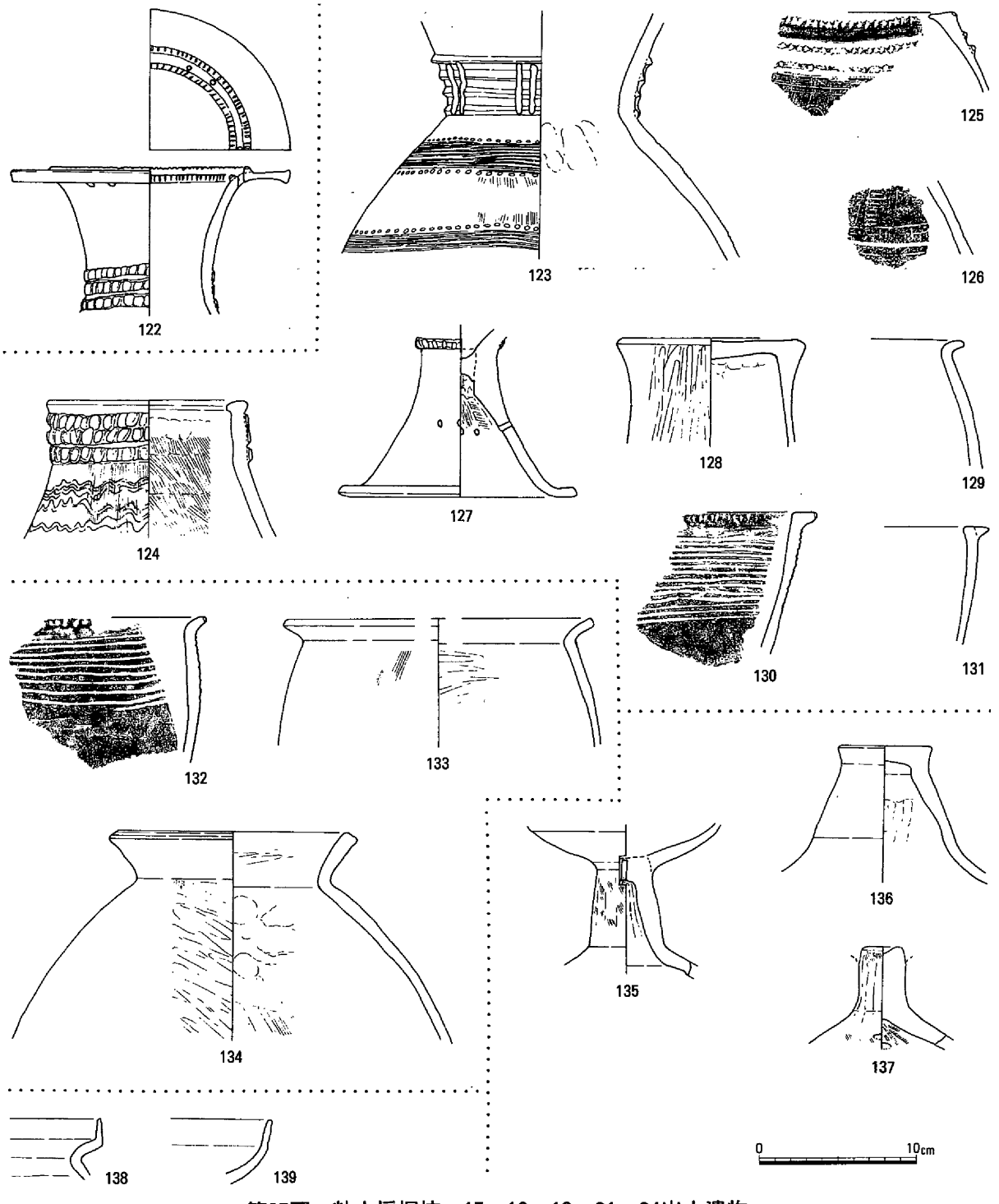
蓋101・102がある。92は頸部に棒状浮文を、94は体部にヘラ描沈線文を、95は口縁端部に斜格子文を施す。甕はヘラ描沈線文を持つ97・98・106と平行櫛描文の93がある。105は口縁上面に三角形刺突文を２重に、平行櫛描文を口縁部下に、その下には三角形刺突文を配する。91は口縁部に２条の沈線と刻目文を施す。101は上部に穿孔がある。92・94・97・98・106は弥生時代前期後葉に、105は中期前葉、91は中期中葉に位置し、その他は中期の範疇に収まると考えられる。103は軒瓦で近世である。

粘土採掘坑－14出土遺物（第24図、図版８－１）

弥生土器、近世陶器がある。弥生土器は、壺108～112、甕113～120がある。108は口縁部が下方に拡張し、端面に綾杉文状の刻目文と２条の指頭圧痕文突帯を施す。109は頸部の貼付突帯文に円形刺突文を、110は口縁端部に斜格子文を、111は口縁部に２条の貼付突帯文と口縁端部に刻目文を施している。112は耳状突起を持ち、口縁部の内外端面に刻目文、外面には波状櫛描文と刺突文を施す。甕の113・114・116・118はヘラ描沈線文を口縁部下に施し口縁端部には刻目文を有する。118はヘラ描



第24図　粘土採掘坑－14出土遺物

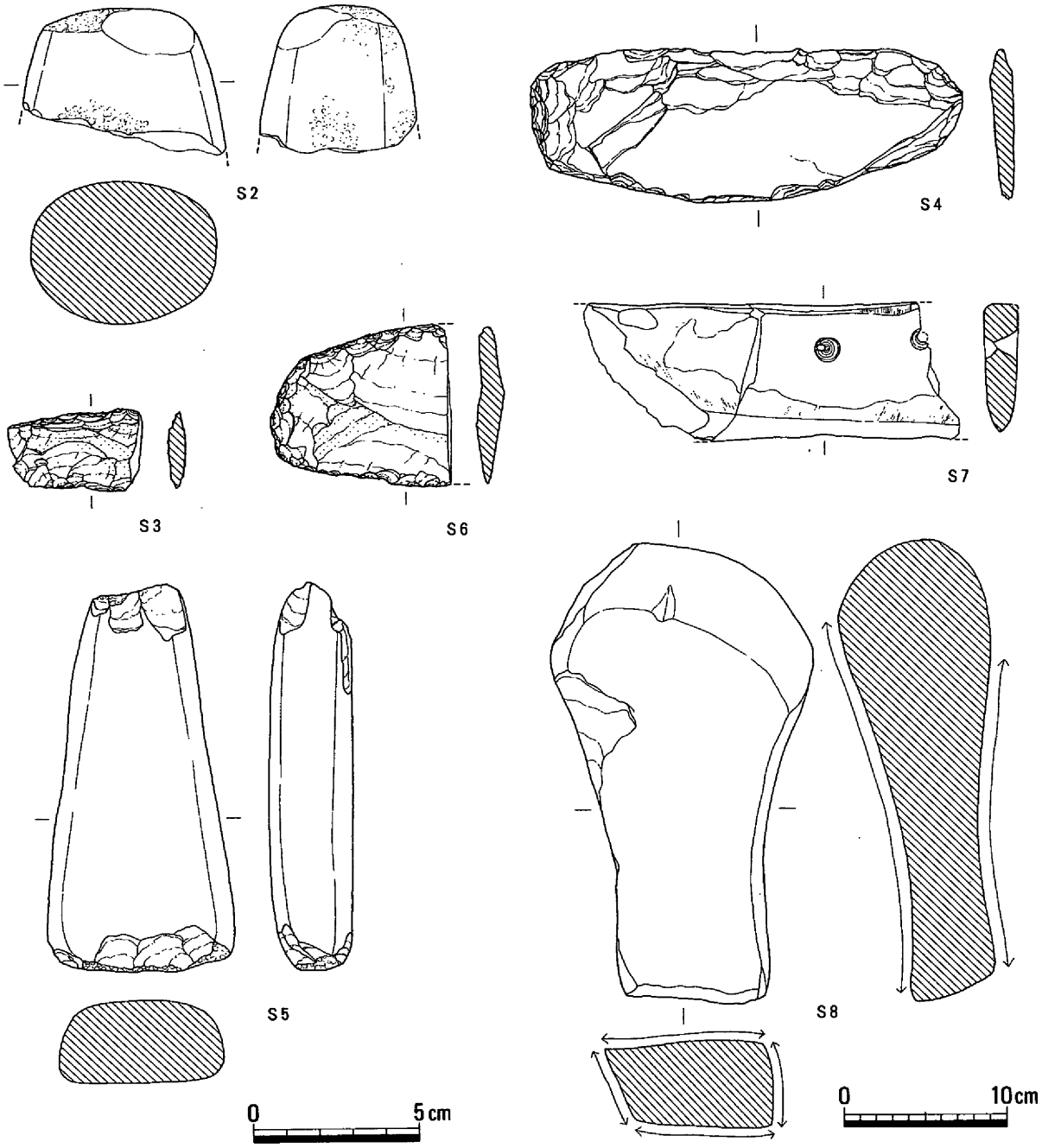


第25図　粘土採掘坑－15・16・18・21・24出土遺物

沈線文の下位に三角形刺突文を巡らす。如意状口縁のものと逆「L」字状のものがある。**113～118**は弥生時代前期後葉、その他は中期中葉の時期と考えられる。**121**は近世の備前焼大甕の口縁部である。

粘土採掘坑－15・16・18・21・24出土遺物（第25図、図版８－１）

弥生土器、土師器がある。弥生土器は壺**122～126**、甕**129～134**、高杯**127・135・137・139**、回転台形土器**128**、蓋**136**がある。土師器には甕**138**がある。**122**は口縁部内面に貼付突帯刻目文を２条と２個一対の穿孔と、頸部に３条の貼付突帯文を施している。**123**は頸部に棒状浮文と体部にヘラ描沈線文と刺突文を施す。**124**は**125**は無頸壺で２条の貼付突帯と口縁端部に刻目文を施す。甕は**130・132**はヘラ



第26図　粘土採掘坑出土遺物

描沈線文を施し、口縁端部に刻目文を持つ。**133**は「く」の字状の口縁を持つ。**138**は受け口を呈する甕の口縁部で、古墳時代前期のものと考えられる。**123・130・132**は弥生前期後葉で、**122～129・131～134・136**は弥生時代中期前葉～中葉のものであろう。

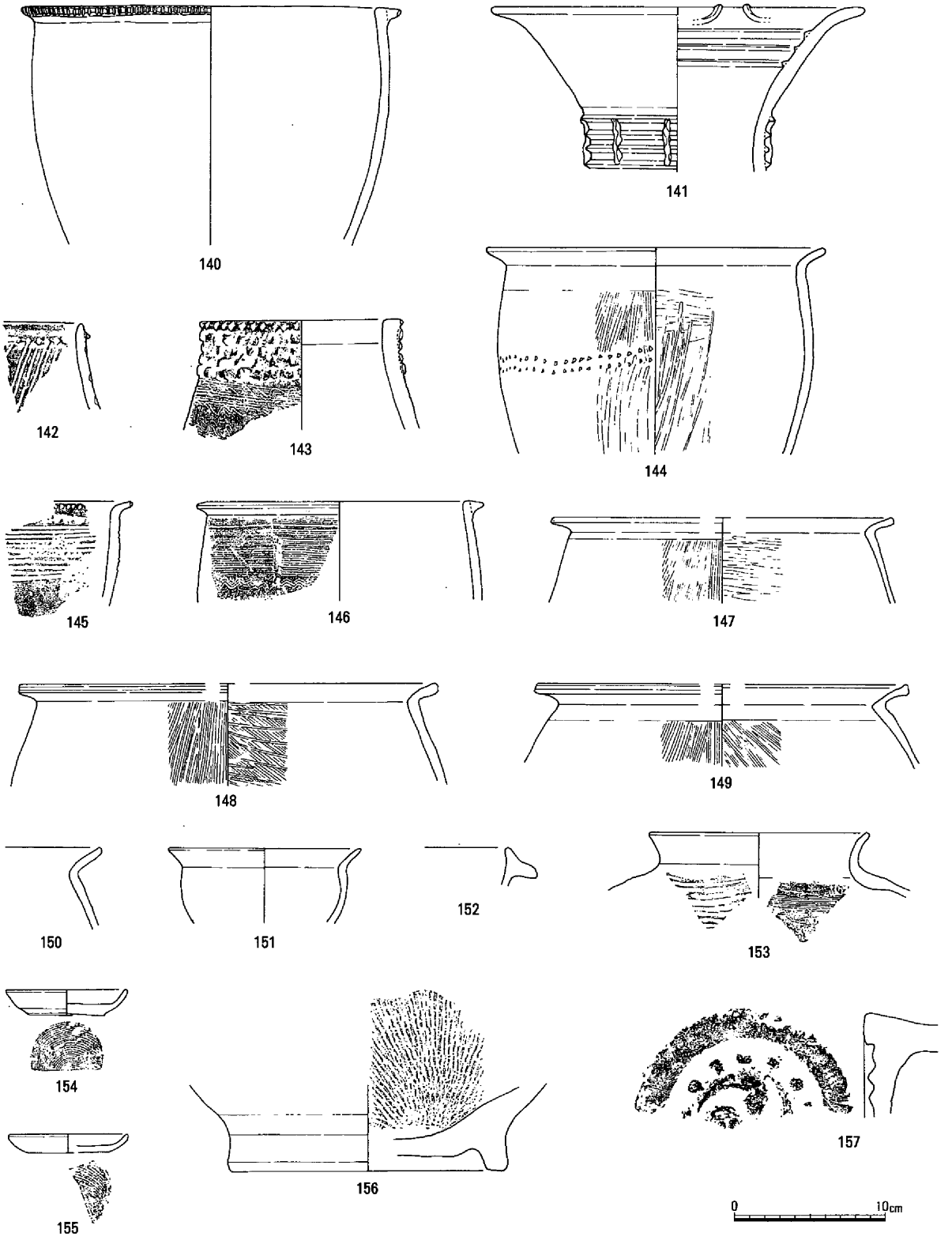
粘土採掘坑出土遺物（第26図、図版９－２）

S2は太型蛤刃石斧の基部である。**S3**はサヌカイト製のスクレイパーである。**S4**は結晶片岩の石包丁であるが、未製品と考えられる。**S5**は敲石であるが、太型蛤刃石斧を転用したもので、刃部で敲打している。元の太型蛤刃石斧の形態は長台形で扁平なものである。**S6**はサヌカイト製の打製石包丁で、一部にケイ酸が付着している。**S7**は粘板岩製の磨製石包丁で本来は長方形を呈すると考えられる。**S8**は砥石で砂岩である。４面とも使用している。

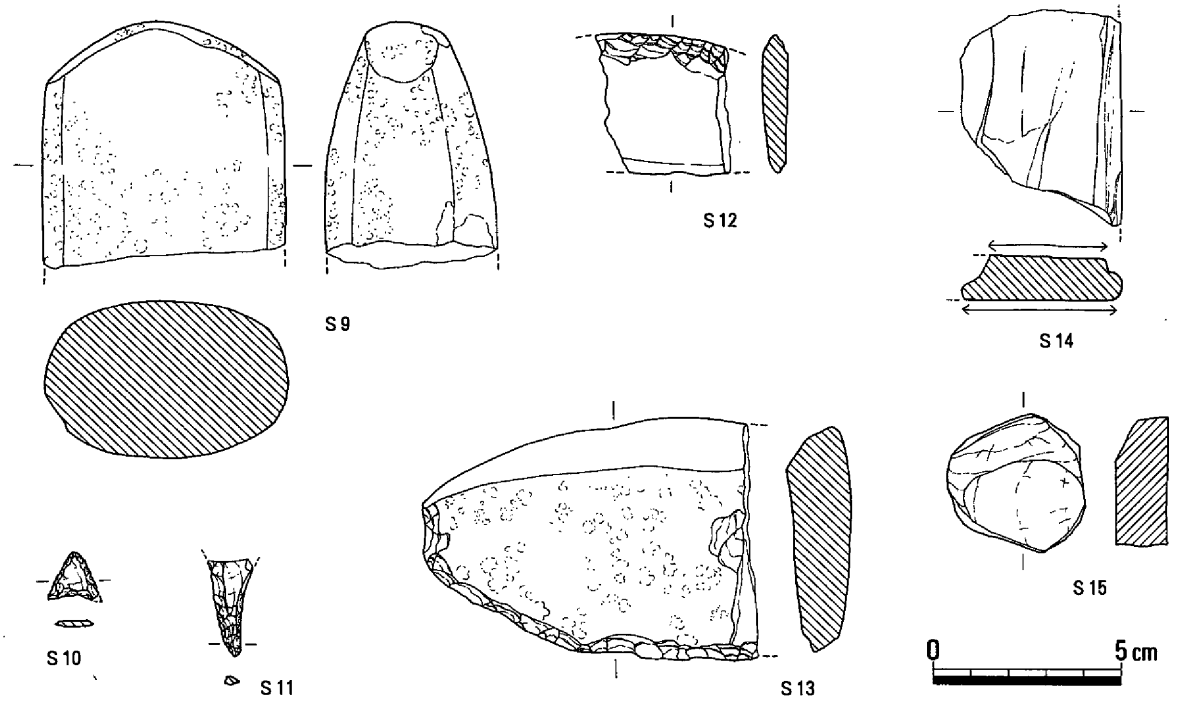
５．遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物（第27・28図、図版９－１・２）

包含層中出土や遺構検出中に出土している遺構に伴わない遺物には、縄文時代晩期～近世までの遺



第27図　遺構に伴わない遺物（1）



第28図　遺構に伴わない遺物（2）

物がある。縄文晩期沢田式期の深鉢142が１点出土している。弥生時代前期後葉の土器は、甕140・145、壺141がある。140は逆「L」字状の貼付口縁の端部に刻目文を施し、体部上半は無文である。145は如意状口縁に11条のヘラ描沈線文を持つ。141は口縁部内面に貼付突帯文で直線文を施し、頸部外面には貼付突帯文に棒状浮文が施される。弥生時代中期の土器では、壺143、甕144・146～149がある。甕は逆「L」字状の貼付口縁を持ち、平行櫛描文と波状櫛描文を施す。146は中期前葉であると考えられる。その他は口縁部が「く」の字を呈しており、弥生中期中葉と考えられる。内面の調整は、144・147が体部上半にヘラミガキ調整を行っており、148はハケ調整のあと粗密なヘラミガキ調整を行っていて、時期差とも考えられる。148・149の口縁部の稜は、口縁部を強くナデたことによってついたものであると考えられる。土師器では、甕150と鉢151がある。150は、「く」の字状に外反する口縁を持つ。151は直径12.7cmで口縁部が外反し、古墳時代前期後半の小形の鉢と考えられる。中世の土器としては羽釜152、甕153、小皿154・155がある。152は瓦質焼成されており、鍔部と口縁部が近く、鍔部が厚い。14世紀代のものと考えられる。153は須恵質で、外面には平行タタキが施される。154・155は、須恵質で胎土に砂粒が多く入っており、備前焼であると考えられる。ともに口径は7.9cm、器高1.7cmであるが、154は底部と体部の境が明瞭で古い様相を持つ。底面にはイトキリの痕跡がみられる。近世の遺物は擂鉢156、軒丸瓦157がある。156は大形の台付きの擂鉢で、17世紀後半から18世紀のものと考えられる。157は珠文が離れ、三巴文の頭部と尾部との境が明瞭であることから、17世紀後半以降のものと考えられる。石器は、S９は太型蛤刃石斧の基部と考えられる。S10はサヌカイト製の打製石鏃で基部の形状は凹基式である。S11はサヌカイト製の打製の石錐である。頭部は欠けており、錐部のみ出土している。S12は溶結凝灰岩製の磨製石包丁である。元の形状は直線刃半月型を呈すると考えられ、刃部は片刃で背部は研磨していない。S13は流紋岩製の磨製石包丁の未製品であると考えられる。体部には敲打による調整の痕跡と敲打によって紐部を穿孔しようとした窪みがある。S14は流紋岩の砥石で、両面を使用している。S15はサヌカイトの石製円盤である。　（時實）

第３節　２次調査の遺構と遺物

平成９年度に実施した発掘調査時において、用地の問題から歩道が拡幅される予定の箇所であった交差点南西隅部分の調査が未実施のまま繰り越しとなった。

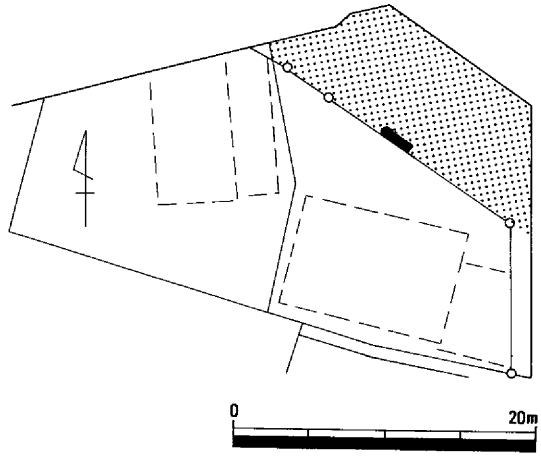
平成10年度末に用地問題が解消されたことから平成11年４月５日にガソリンスタンドのタンク漕撤去に伴い文化課職員が立会調査を実施した。

この結果、調査予定地範囲はタンク漕埋設時において大幅な削平を受けており、遺構の残存状況は良好ではなく、以下に説明する土壙－12の１基を確認したにとどまった。このため、引き続き、この土壙の記録調査を実施することとした。

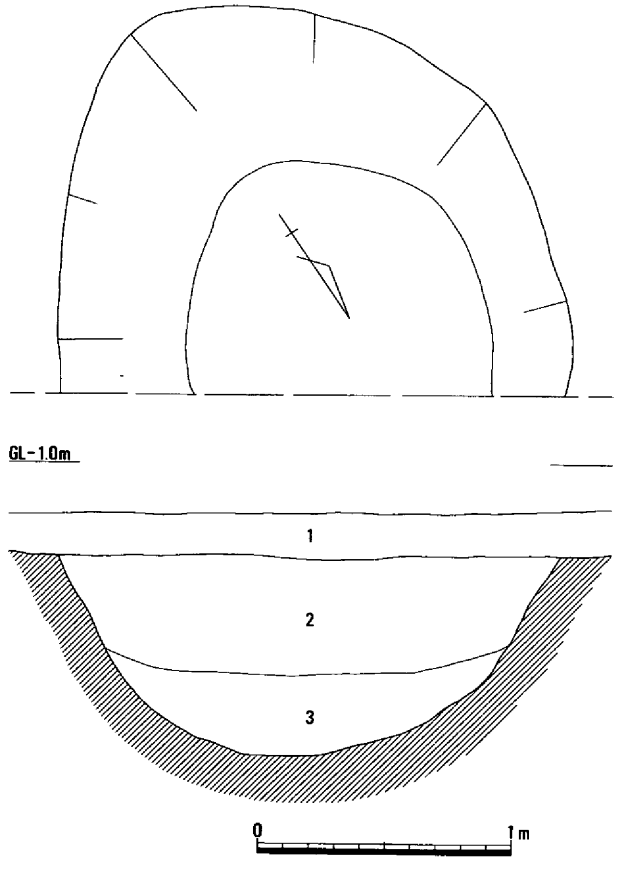
土壙－12（第29～34図、図版３－６・10－１）

タンク漕掘削部南西長辺東部分において、当初断面観察により確認された。このため、平面的な検出を行ったところ、土壙がタンク漕掘削時に半裁された状態であることが判明した。現存の大きさは短軸方向で200㎝、長軸方向で150㎝を測ることから本来は楕円形を呈する長軸で約250㎝程度の規模を有する土壙と推測される。深さは77㎝を測り、断面形は緩やかなU字を呈する。土壙が位置する箇所は約120㎝の造成土がなされ、この直下に旧水田層が存在する。旧水田層下は黄褐色の基盤層が存在し、土壙自体はこの基盤層から掘り込まれている。埋土は大きく２層に分離でき、上層が下層より黒色が強い。両層とも炭・焼土を多量に含むが、下層により多くの土器の包含が認められる。

出土土器には、弥生時代前期後葉から中期中葉までのものがあるが、層ごとの差異は特に認められなかった。　　（大橋）



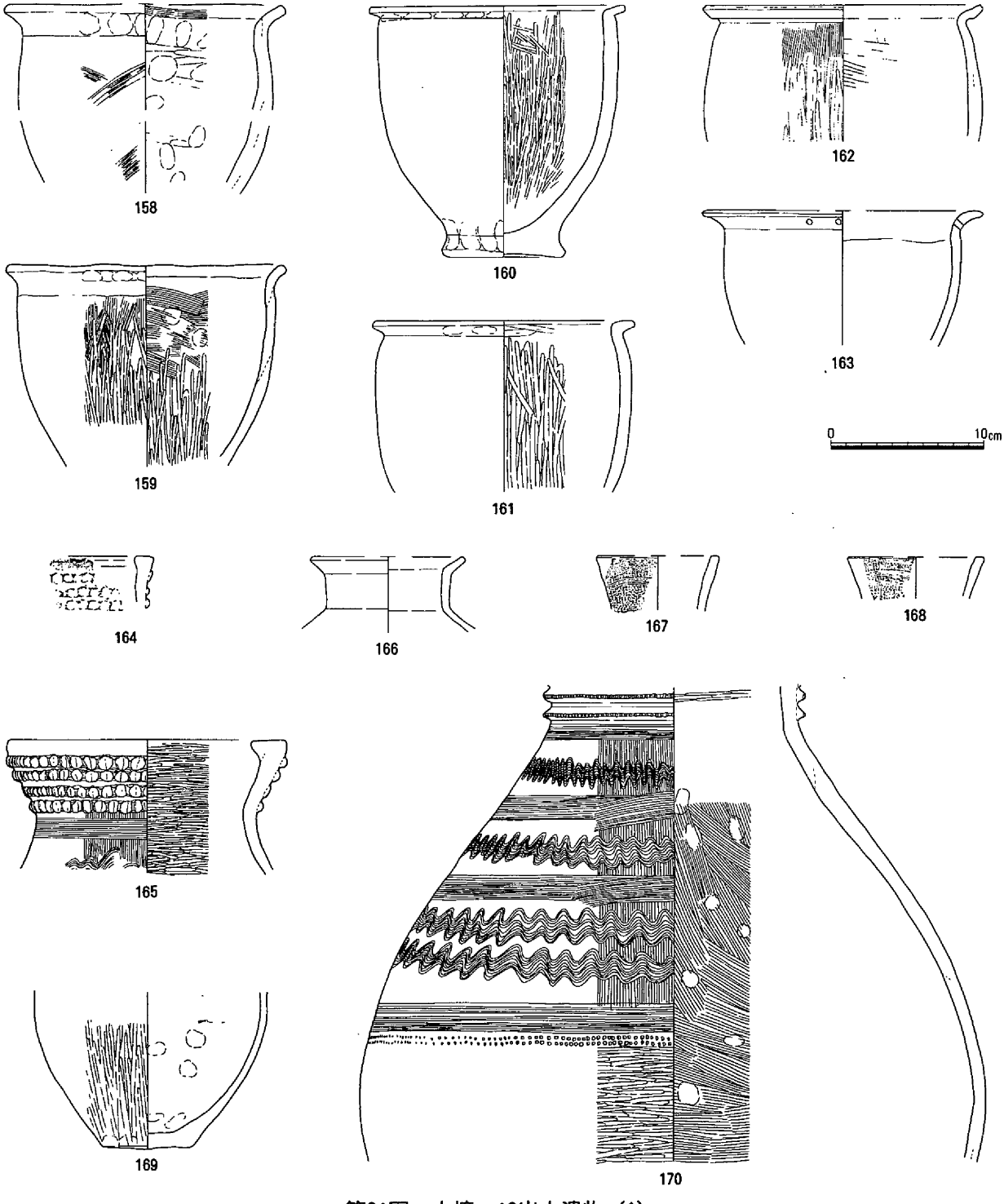
第29図　土壙－12検出位置（1/500）



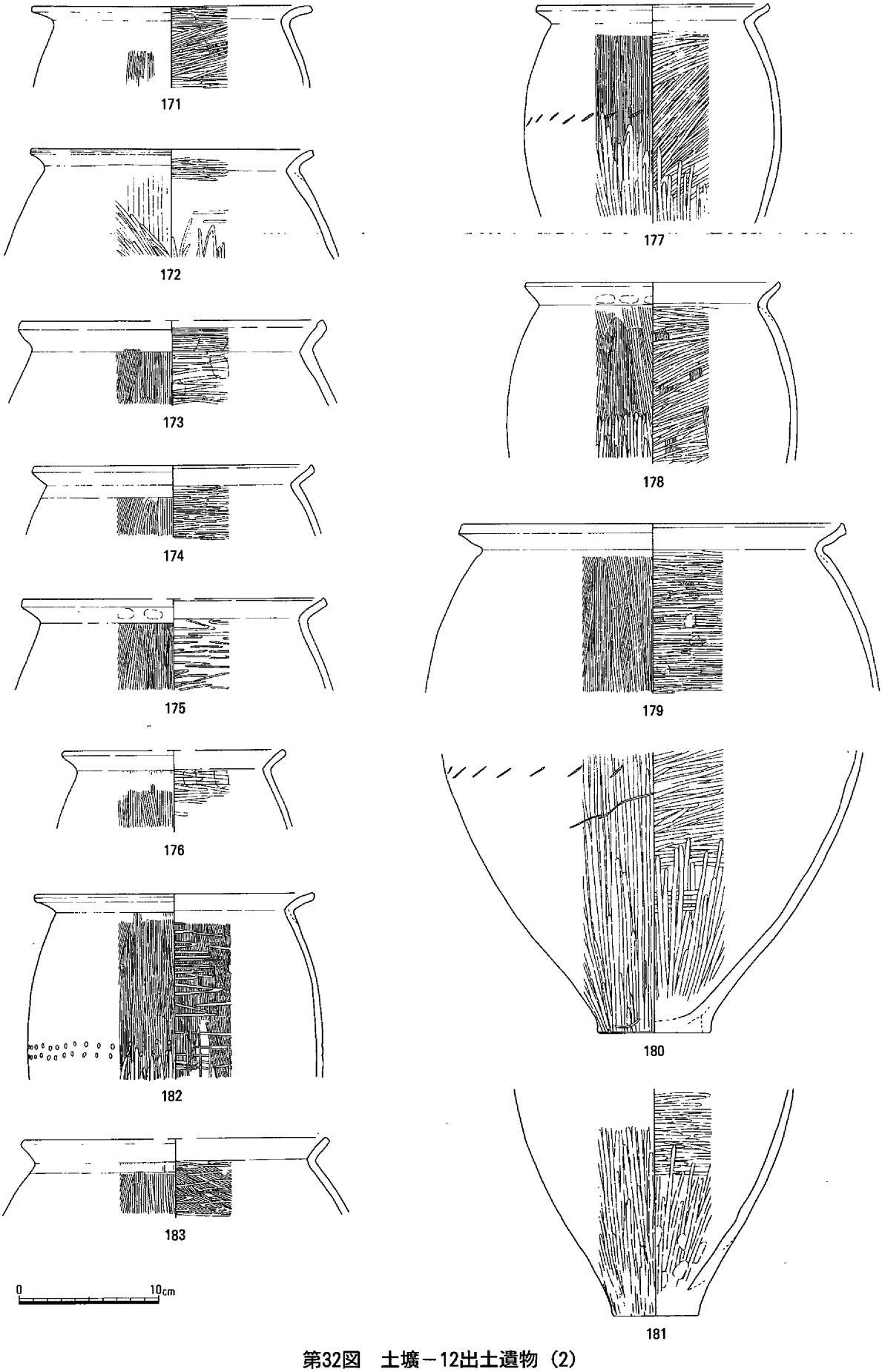
1．青灰色粘土
（旧水田層）
2．黒色土
（土器・炭・焼土を含む）
3．黒茶褐色土
（土器・炭を多量に含む）

第30図　土壙－12（1/30）

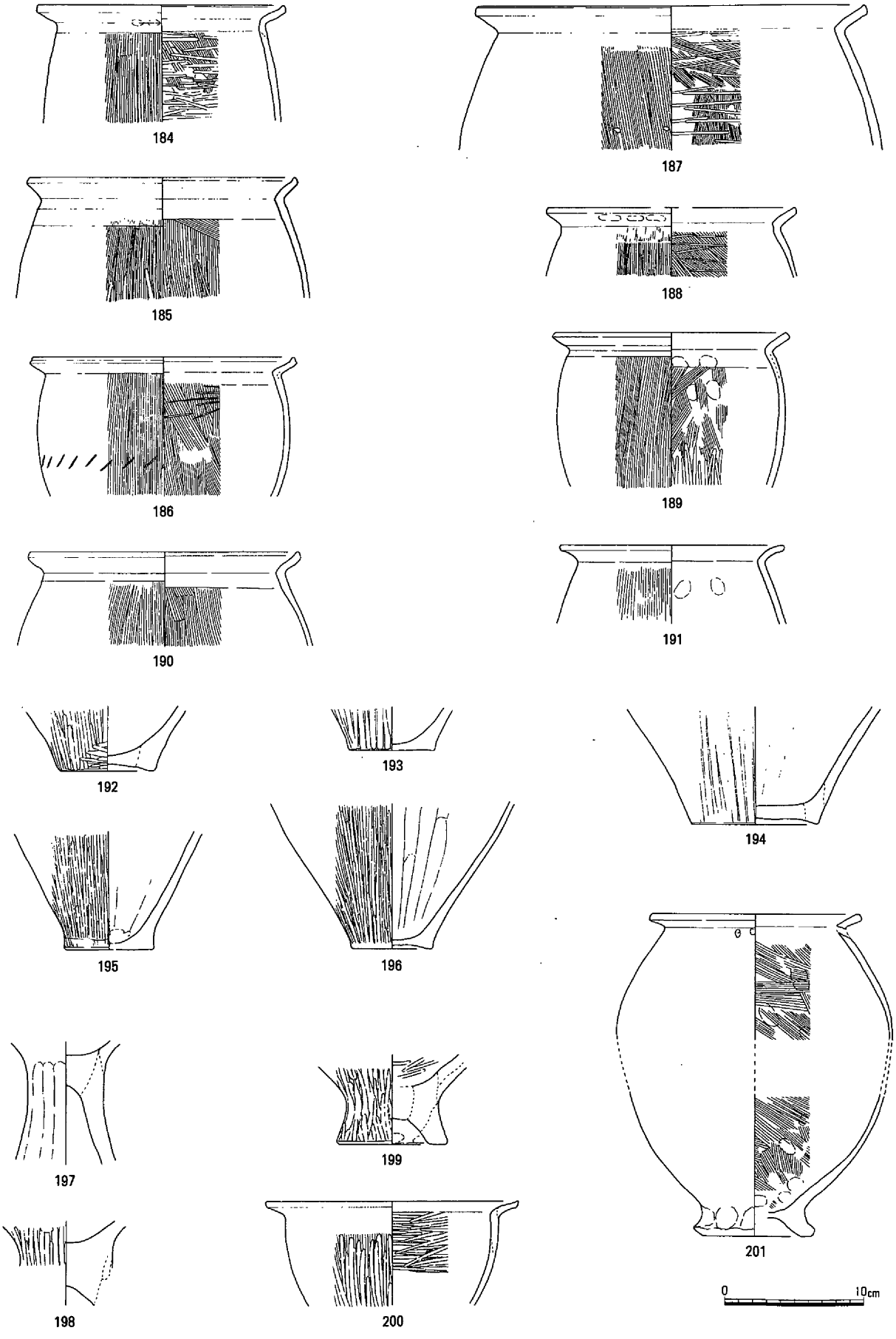
遺物はコンテナにして約３箱と多く出土しているものの、その多くは細片での出土あった。鉢158～163は弥生時代前期後葉に位置するものである。158・159は、如意状口縁を呈している。158は器壁が12㎜と厚く、内面の調整もユビオサエの痕跡が残るほど粗いヘラミガキが施されるのみである。159は内外面ともに、体部下半にはヘラミガキが行われ、丁寧な作りである。160・161は口縁部下端の外面から指で押さえることによって逆「L」字状を呈しており、ユビオサエの痕跡が明瞭に残っている。内面の調整はヘラミガキが行われている。161は口縁部内面に横方向にヘラミガキが行われている。



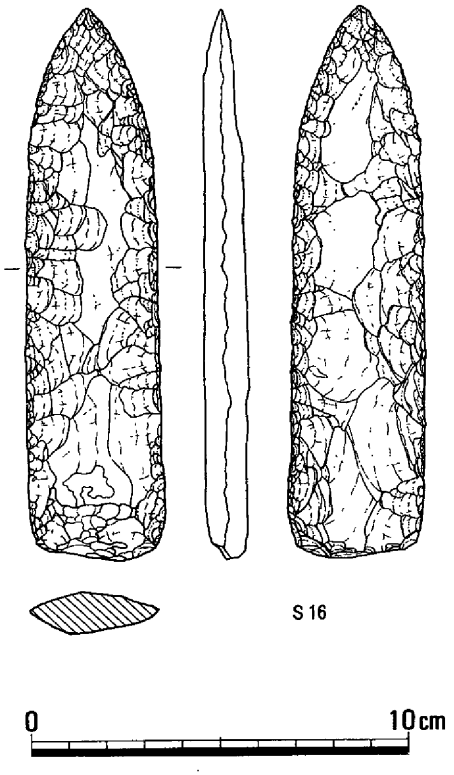
第31図　土壙－12出土遺物（1）



第32図　土壙－12出土遺物（2）



第33図　土壙－12出土遺物（3）



第34図　土壙－12出土遺物（4）

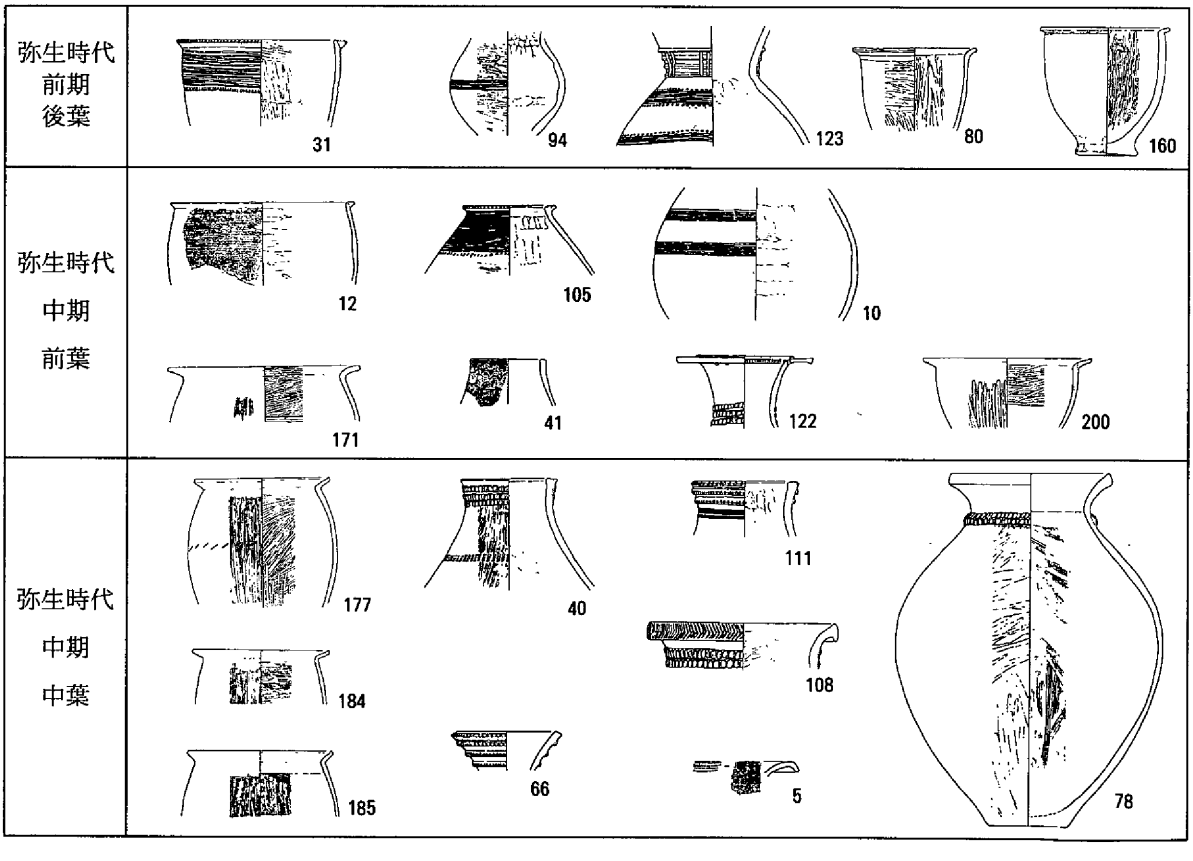
162は口縁部外面下端を強くなでて口縁部を外反させている。口縁端面には、ナデによって弱い稜線が付く。163は２孔一対の穿孔が開けられている。壺164～170、甕171～196・201、高杯197・198・200、鉢199は弥生時代中期前葉から中葉に位置している。164は外面に指頭圧痕文突帯が巡り、口縁端部は水平で内にやや肥厚している。165は、外面に平行櫛描文と波状櫛描文が施され、内面の調整は密にヘラミガキが行われている。166は口縁部と考えられるが全体の器形は不明であり、調整も不明瞭である。167・168の口縁部は上端面が水平で、外方に開く。外面には平行櫛描文、波状櫛描文が施されている。170は頸部に２条の貼付刻目突帯文を施し、倒卵形の体部外面には波状櫛描文、平行櫛描文、円形刺突文を施し、体部外面下半はヘラミガキ調整を行っている。体部内面はハケメ調整である。171・172は、口縁部内面にヘラミガキを施している。171は、口縁部が弱く外反しており、口縁部内面をヘラミガキ調整するために外反すると考えられる。173は、口縁部内面に横方向のハケメ調整をおこなっており、体部内面はヘラミガキ調整を行っている。174～181は、内外面の調整手法のみをみると、外面は上半は多方向のハケメ、下半は縦方向のヘラミガキをおこなっており、内面はハケメ調整の後、上半に横、または左斜め下方向のヘラミガキが密に行われ、口縁部にはナデ調整が行われている。口径に15.4cm～26.8cmとばらつきが見られるものの、おおよそ３法量に分けることができる。177や180のように、胴部最大径付近に、ハケ状工具による刺突文が施されているものもある。182～184・186～188は、内外面の調整が外面上半は縦方向のハケメ、内面上半はハケメの後に粗い横方向のヘラミガキを行っている。法量は２法量ある。185・189・190は体部上半の調整が内外面ともに縦方向のハケメのみである。これらの内面調整は、徐々に簡略化されていく傾向を示している。189は体部下半に縦方向のヘラミガキを施している。194・195・196は、体部下半内面に縦方向のナデを施しているものである。201は台付の甕で、台部にユビオサエが明瞭に残っており、粗雑なつくりをしている。２個１対の穿孔が口縁部下に２箇所ある。197・198は高杯の脚部であり、杯部は円盤充填によって作られている。197は脚部外面に粗いヘラミガキを縦方向に施される。198は杯部の下面の厚さが32mmと厚く、外面には細かい縦方向のヘラミガキが施されている。200は高杯の受部であり、口縁部が「く」の字状に外反するもので、内外面を丁寧に磨いている。199は台付鉢の台部である。底面は22mmを測るもので厚く、円盤充填法で作られている。脚部および体部は外面を丁寧に磨いている。S16は、サヌカイト製の尖頭器である。長さ14.5cm、幅3.7cmを測る。両側辺が平行で尖頭部が三角形を呈しており、基部は自然面のままである。この尖頭器は二上山のサヌカイトを用いている可能性があると考えられる。

（時實）

第4章　まとめ

1．遺物と遺構の変遷について

今回の調査で出土した土器は弥生時代前期後葉～中期中葉のものと考えられる。この時期の土器は一括資料が県内でも少なく、また器種が多くバラエティーに富む。編年も細かい点ではいまだ流動的な感がある。このため、一番型式変化の追いやすい器種である甕を中心に土器の変遷をまとめ、遺構の変遷について考えてみたい。甕で、弥生時代前期後葉に位置付けたものは、口縁部が如意状または逆「L」字形を呈しており、胎土は粗い砂粒を含む。体部上半にヘラ描沈線文を、口縁端部に刻目文を施すものが多い。また、ヘラ描沈線文を施さないものもある。ヘラ描沈線文の条数の少ないものは、その中でも古相になると考えられる。中期になるとヘラ描沈線文から櫛描沈線文に変化し、これを中期前葉の古相とした。新相は体部外面には櫛描沈線文は施されなくなり、口縁は「く」の字でゆるく外反するものとした。口縁部から体部にかけて、内面はミガキ調整を行う。胎土には粗い砂粒が含まれなくなる。中期中葉になると口縁部は「く」の字で、口縁部内外面のヘラミガキ調整が省略され、ヨコナデが施されるものを位置付けた。内面の調整は、ハケ調整の後にヘラミガキ調整を行っているが、このヘラミガキ調整が体部上半でハケメ調整がわからないほど密に施されるもの、ハケメが見える程度に粗密に施すもの、ヘラミガキは施さずにハケメ調整のみが施されるものがある。この調整の



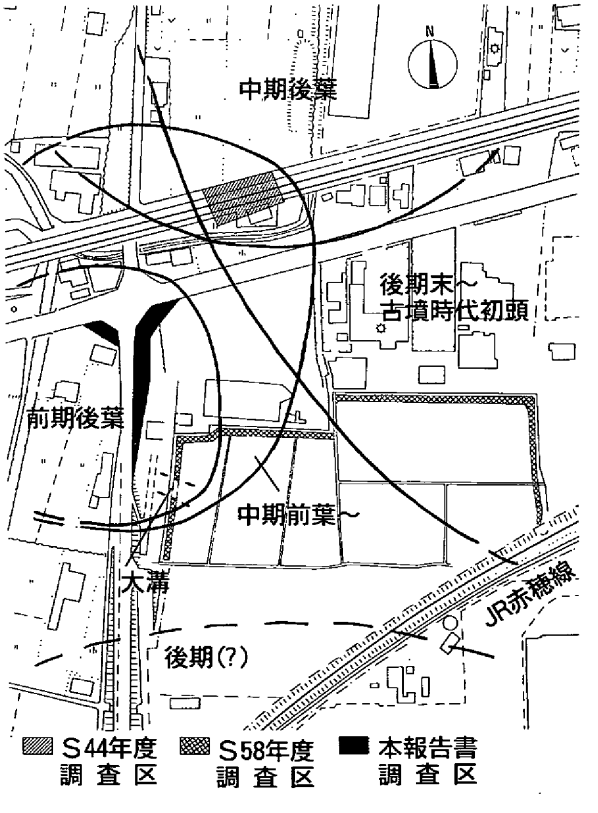
第35図　土器変遷図（1/10）

簡略化は時期差ともバリエーションとも考えられる。体部下半は縦方向のナデ調整を行っているものがあり、これはヘラミガキ調整のものより後出する要素であると考えている。体部下半をヘラケズリ調整するものは出土していないことから、中期中葉の古相と中相の時期にあたると考えている。壺は全形の判るものが少ないが、甕と同様、前期後葉のものとしてヘラ描沈線文を施しているものがある。**123**は頸部と体部の境が明瞭であり新相に位置付ける。**41・40・111・66**は中部瀬戸内で多く見られるもので、口縁部が直立して櫛描波状文を施す**40**を中期前葉新相、指頭圧痕文や刻目文で口縁部を加飾し外反する**40・111**を中葉古相、大きく外反する**66**を中葉中相と考える。口縁部の加飾は指頭圧痕文のみのもの、口縁端部に刻目文と指頭圧痕文または、刻目突帯文を施すものが存在した。**122**は中期前葉新相の長頸広口壺で口縁部が水平で下垂しておらず、古い要素を持つと考えられる。鉢は、前期後葉は甕と同様の口縁形態を持つ**80・160**を位置付けた。

これらの遺物と、遺構の切り合い関係から考えられる遺構の変遷は、まず弥生時代前期後葉に溝－2が掘削される。中期前葉には土壙－6が存在し、溝－2が埋没した後、中期中葉に溝－1が掘削される。同時期には土壙－2、土壙－10、溝－3などがある。中期中葉中相には土壙－4がある。このように、弥生時代前期後葉から中期中葉中相にかけての集落が存在していたと考えられる。

2．弥生時代の集落について

船山遺跡は過去2度の発掘調査が行われている。調査区は各々狭いながらも近接しており、同一微高地上に立地するものと考えられる。これまでの調査結果から弥生時代を通して集落が営まれたと考えられることから、過去の調査成果を合わせて集落の消長について考えたい。弥生時代前期後葉の遺構は昭和58年度調査と今回の調査で遺構が検出され、今回の調査での遺物量は多い。昭和44年度の調査では遺構は検出されず、遺物量は少量であったという。また、これらの遺構は昭和58年度調査の環濠の可能性のある大溝（以後、大溝とのみ記述）の北側に存在している。弥生時代中期前葉から中葉にかけては遺構数が増え、どの調査区でもこの時期の遺構は検出されている。昭和58年度調査では、やはり大溝の北側で遺構が検出されている。中期後葉になると昭和44年度調査で竪穴住居と溝状遺構が検出されている。今回の調査区ではこの時期の土器の出土が無く、昭和58年度調査でも中期後葉の遺構が検出されていない。後期になると、後期末～古墳時代初頭の遺構が昭和44年度調査で竪穴住居、昭和58年度調査の東側で溝などが検出され、今回の調査区では遺構はなく土器が少量出土している。これらから推測されることは、前期後葉の集落は大溝以北の、今回の調査区周辺に存在すると考えられる。中期前葉から中葉の集落は大溝以



第36図　弥生時代集落想定位置図（1/4,000）

北に存在するものの、遺跡の北側にまで拡大するようである。中期後葉には遺跡の北側に集落は移動すると考えられる。後期の集落は、後期末になって遺跡の北東側に存在すると考えられる。後期は後期末以前の状況は不明であるが、田代健二氏はＪＲ赤穂線付近の試掘調査で後期の土器が出土していることと、中期までの遺構が大溝以北に存在することから後期には大溝以南に集落が移動したと推測されている。（註１）このように、船山遺跡では同一微高地上で時期によって集落の移動があると考えられる。

３．竪穴住居－１について

今回の調査で検出した遺構の中で竪穴住居－１と報告したものは、検出した西辺の規模が１辺2.3ｍと小規模で平面形が方形または長方形を呈すると考えられ、壁体溝と中央穴を持ち、主柱穴は無く、床面には強い被熱痕跡が認められるものであった。この遺構の類例は県内では管見の限りでは無かった。しかし、中央穴を持たないものであれば、「長方形竪穴住居状遺構の（イ）」（註２）「竪穴遺構Ｃ」（註３）と分類されている遺構に類似しており、県内で20例以上見受けられる。これらの遺構の共通点としては、平面形が長方形に近く、短辺が２～３ｍ前後と小規模で床面には被熱痕があり、主柱穴が無いということが挙げられる。時期は中期後半の時期に圧倒的に多い。今回検出したものは中央穴があるものの、これらと同様の性格を持つ遺構であると考えている。今回の調査区で中期後葉の遺物が無いことや周辺の遺構の状況から竪穴住居－１は、少なくとも中期中葉以前のものであると考えている。このため、中央穴を伴うタイプが先だって出現する可能性も考えられる。便宜上「竪穴住居」として報告したが住居とは断定できない。遺構の性格については、「食物調理を基本性格に持つ」（註４）という考え方があるが岡山市の高下遺跡ではサヌカイトの剥片が出土し、ビシャコ谷遺跡では多量の土器が出土している。また、竪穴住居複数に対してこのような長方形の竪穴遺構が１軒という検出例が多いものの、高下遺跡では竪穴住居の倍の数の竪穴遺構が検出されており、遺構の性格については集落内での位置付けなどの検討がさらに必要であろう。（時實）

註

（１）田代健二　『船山遺跡発掘調査報告』　エヌ・テー・エヌ東洋ベアリング運動場建設事業埋蔵文化財調査委員会　1985年
（２）行田裕美　『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集　津山市・津山市教育委員会　1984年
（３）行田裕美　『別所谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第49集　津山市土地開発公社 津山市教育委員会　1994年　のなかで、「平面は長方形に限定される。壁面に沿って壁体溝がめぐる。床面の長軸中心線上に焼土面がくる。いまのところ確実に建物配置になる柱穴は床面及び周辺にも確認されていない。規模は大小あるが短辺が２～３ｍ前後、長辺が４～５ｍ前後の比較的小規模なものが多い。」とされているものである。
（４）中山俊紀　「弥生集落」『吉備の考古学的研究』（上）　山陽新聞社　1992年

参考文献

・高橋　護　「山陽」『弥生土器』Ⅰ　ニューサイエンス社　1983年
・正岡睦夫　「備前地域」『弥生土器の様式の編年』―山陽・山陰編―　木耳社　1992年
・高畑知功　「備中地域」『弥生土器の様式の編年』―山陽・山陰編―　木耳社　1992年
・藤田憲司　「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』（上）　山陽新聞社　1992年
・平井典子　「備前・備中」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回到達記念論文集　弥生土器を語る会　1996年
・柳瀬昭彦　岡本寛久　「南方遺跡」―国立岡山病院地方循環器病センター建設に伴う発掘調査―『岡山県埋蔵文化財発掘　調査報告』40　岡山県教育委員会　1981年
・出宮徳尚　『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会 岡山市遺跡調査団　1981年
・岡田　博　「門田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』55　岡山県教育委員会　1983年
・神谷正義　草原孝典　『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1992年
・岡本寛久　内藤善史他　「高下遺跡　浅川古墳群ほか　楢原古墳群　根岸古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』123　建設省岡山国道工事事務所　岡山県教育委員会　1998年
・平井泰男　久保恵里子他　「窪木遺跡」２『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』124　岡山県教育委員会　1998年

遺物観察表（土器・瓦）

掲載番号	実測番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴		色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
1	121	土壙-2	弥生土器	壺	-	-	-	頸部に指頭圧痕文突帯。体部タテハケ後平行櫛描文と２条の波状櫛描文。	ナデ	にぶい褐色(7.5YR6/3)	水漉し粘土	
2	122		弥生土器	甕	20	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部上半ナナメハケ。体部下半タテハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/5)	長石、石英を含む	
3	123		弥生土器	甕	19	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	黄橙色(10YR7/3)	密	
4	124		弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ後ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	水漉し粘土	
5	125	土壙-4	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部３条の平行沈線後、刻目文。	口縁部斜格子文。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	水漉し粘土	
6	127		弥生土器	壺	-	-	-	口縁部ヨコナデ。	頸部指頭圧痕。	浅黄橙色(10YR8/3)	長石、石英、雲母、角閃石を含む	
7	126		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半４条の平行ヘラ描沈線文。	ナデ。	にぶい褐色(7.5YR5/3)	長石、石英、赤色土粒を含む	
8	128		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付楕円刺突突帯文。体部上半平行櫛描文。	ナデ。	黒褐色(10YR3.5/1)	雲母を多く含む、角閃石を含む	
9	129		弥生土器	甕	21.5	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。	灰褐色(7.5YR6/2)	雲母、角閃石を多く含む	
10	132	土壙-6	弥生土器	壺	-	-	-	一部ミガキ。１単位８条の平行櫛描文が２条。	指頭圧痕文	橙色(5YR6/6)	長石、石英、赤色土粒を多く含む	
11	131		弥生土器	壺	-	-	-	８条の平行櫛描文後、３条の波状櫛描文。タテミガキ。	ヨコハケ後ヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英を若干含む	
12	133		弥生土器	甕	23.2	-	-	口縁部貼付突帯。口縁部ヨコナデ。体部上半平行櫛描文、波状櫛描文。	ヨコヘラミガキ。	灰黄褐色(10YR6/2)	長石、石英を若干含む	
13	138		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。口縁部貼付刻目突帯文。体部上半15条のヘラ描沈線文と三角形刺突文。	ナデ	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、角閃石を含む	
14	134		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付突帯。口縁部ヨコナデ。体部上半平行櫛描文、波状櫛描文。体部ナデ。	体部上半ヨコヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、金雲母、角閃石を含む	
15	137		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付突帯。口縁上端部２列の三角形刺突文。体部上半平行櫛描文、三角形刺突文。体部下半ナデ、タテヘラミガキ。	ナデ。	にぶい橙色(5YR6/5)	長石、石英、角閃石を含む	
16	136		弥生土器	甕	-	-	-	体部上半10条のヘラ描沈線文、円形刺突文。	ヨコナデ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、赤色土粒を含む	
17	135		弥生土器	甕	-	-	-	不明瞭。	不明瞭。	黄橙色(10YR7/3)	長石、石英を含む	
18	143	土壙-10	弥生土器	甕	28.8	-	-	不明瞭	不明瞭	浅黄橙色(7.5YR8/3)	金雲母、角閃石を僅かに含む	
19	142		弥生土器	甕	14.9	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	明褐灰色(7.5YR7/2)	精密	
20	109	溝-1	弥生土器	壺	12.2	-	-	口縁部ユビオサエ後ヨコナデ。頸部３条のヘラ描沈線文。体部ヨコヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。体部上半シボリ。	灰白色(10YR8/1.5)	長石、石英、シャモット、赤色酸化土粒を含む	
21	105		弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部ユビオサエ後ヨコナデ。体部ナデ。	口縁部指頭圧痕後ヨコナデ。体部ナデ。	浅黄橙色(10YR8/2.5)	長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	
22	107		弥生土器	甕	21.2	-	-	口縁部ヨコナデ。	ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7.5/2)	長石、石英、角閃石を含む	
23	108		弥生土器	鉢	7.6	3.5	6.4	口縁端部ヘラミガキ。体部タテヘラミガキ。	ナデ。	褐灰色(10YR5.5/1)	長石、石英、角閃石、雲母を多く含む	
24	106		弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部ヨコナデ。口縁部下貼付突帯。体部ナナメハケ。	タテハケ後ヨコヘラミガキ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を含む	
25	110	溝-2	弥生土器	壺	-	-	-	底部貼付突帯上に刻目文。体部タテハケ。	頸部ナデ、シボリ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英を含む	
26	111		弥生土器	壺	-	-	-	頸部８条のヘラ描沈線文。	ナデで、一部ナナメハケ。	にぶい橙色(5YR6/5)	長石、石英を僅かに含む	
27	112		弥生土器	壺	-	-	-	２条の直線貼付突帯と弧状の貼付突帯。体部下半ヨコヘラミガキ。	ナデ。	にぶい橙色(5YR6/6)	長石、石英、赤色酸化土粒を僅かに含む	
28	118		弥生土器	甕	18	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半７条のヘラ描沈線文、下半ヨコナデとナナメハケ。	不明瞭	浅黄橙色(10YR8/3.5)	長石、石英、赤色酸化土粒を多く含む	
29	117		弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙色(5YR6.5/4)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
30	114		弥生土器	壺	12	-	-	口縁端部刻目文。	不明瞭	にぶい黄橙色(10YR7/3.5)	長石、石英を多く含む	
31	119		弥生土器	甕	22	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半12条のヘラ描沈線とその下に三角形刺突文。	口縁部ナナメヘラミガキ。体部タテミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/3.5)	長石、石英、角閃石、金雲母を多く含む	
32	115		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部刻目文、ヨコナデ。体部上半９条のヘラ描沈線文。体部ナデ。	タテヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR5/3)	長石、石英、角閃石、金雲母を多く含む	
33	116		弥生土器	甕	20.6	-	-	口縁端部楕円形の刺突文。口縁部ヨコナデ。体部上半11条のヘラ描沈線文。体部ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
34	120		弥生土器	甕	18	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半一部タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部上半ナナメハケ。下半指頭圧痕後タテハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む	
35	139	溝-3	弥生土器	壺	-	-	-	ヘラ描沈線文。三角形刺突文。口縁端部刺突文と同じ原体で刻目文を施す。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR5/2)	精密	
36	140		弥生土器	甕	19.2	-	-	口縁部貼付突帯、ヨコナデ。体部上半平行櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英を含む	
37	141		弥生土器	甕	17	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む	
38	34	粘土採掘坑-1	弥生土器	甕	-	-	-	体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ	浅黄橙色(10YR8/3)	雲母、角閃石を若干含む	
39	35		近世陶器	摺鉢	-	-	-	ヨコナデ。	ヨコナデ。体部密な摺り目。	暗赤褐色(2.5YR3/3)	密	伊賀焼
40	33	粘土採掘坑-2	弥生土器	壺	10	-	-	口縁部指頭圧痕文突帯。体部刺突文、タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰黄褐色(10YR6/2)	雲母、角閃石を多く含む	
41	38		弥生土器	壺	10.7	-	-	口縁部ヨコナデ。頸部櫛描波状文で５条一単位を３回。波状文下に平行櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、雲母、角閃石を多く含む	
42	43		弥生土器	壺	-	-	-	体部平行櫛描文、波状櫛描文。	ナデ。	にぶい黄橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、金雲母を含む	
43	41		弥生土器	壺	-	-	-	タテハケ後、平行櫛描文と波状櫛描文。	ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
44	42		弥生土器	壺	-	-	-	タテハケ後、平行櫛描文と波状櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
45	40		弥生土器	壺	-	-	-	体部貝殻腹縁文。	不明瞭。	褐灰色(10YR4/1)	雲母、角閃石を僅かに含む	
46	36		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部刻目文。体部上半２条のヘラ描沈線文。	ナデ。	灰色(2.5Y8/1)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
47	34		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	浅黄橙色(10YR8/3)	雲母、角閃石を僅かに含む	
48	37		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部、体部ヨコナデ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、雲母、石英、角閃石を多く含む	
49	45		白磁	碗	15.3	-	-	玉緑口縁。釉が掛かる。	釉が掛かる。	灰白色(7.5Y7/1)	密	
50	46		白磁	碗	-	4.4	-	高台に離れ砂付着。高台内面以外施釉。	釉が掛かる。貫入が多い。	灰白色(7.5Y7/1)	密	
51	77	粘土採掘坑-4	弥生土器	壺	-	-	-	タテハケ後、平行櫛描文と波状櫛描文。	タテハケ。	灰白色(10YR8/1.5)	雲母を多く含む	
52	48		弥生土器	甕	-	-	-	不明瞭。	不明瞭。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	金雲母、雲母、角閃石を含む	
53	47		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半平行櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英を多く含む	
54	51		弥生土器	壺	13.8	-	-	口縁端部刻目文。口縁部タテハケ後指頭圧痕文突帯と平行櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、雲母、赤色酸化土粒を多く含む	
55	49		弥生土器	壺	8	-	-	不明瞭。口縁部に２個１対の穿孔。	ナナメハケ。	灰白色(10YR8/1.5)	長石、石英を多く含む	
56	50		弥生土器	壺	8.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部刺突文、ハケ後タテミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ後タテヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を若干含む	
57	53		弥生土器	壺	-	-	-	平行櫛描文、波状櫛描文、３列の刺突文。	ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英、雲母を含む	
58	54	粘土採掘坑-5	弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半９条のヘラ描沈線文。	ナデ。	橙色(2.5YR6/7)	石英を多く含む	
59	55		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英を多く含む	
60	56		弥生土器	甕	23.5	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英、金雲母を多く含む	
61	57		弥生土器	甕	-	6.3	-	体部タテヘラミガキ。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/3)	長石、石英を含む	
62	58		弥生土器	甕	9.8	-	-	ナデ。	不明瞭。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を含む	
63	59		弥生土器	甕	-	6.6	-	タテヘラミガキ。	体部タテハケ。底部ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、雲母を多く含む	
64	61		縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部ナデ。	ヨコヘラミガキ。	灰黄褐色(10YR6/2)	長石、石英を含む	
65	60		縄文土器	深鉢	31.4	-	-	体部上半ナデ、１条の沈線。体部下半横方向ヘラケズリ。	ヨコナデ。	灰黄褐色(10YR5/2)	長石、石英を多く含む	
66	64	粘土採掘坑-6	弥生土器	壺	13	-	-	４条の口縁部貼付刻目突帯文。	ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/1.5)	長石、石英、金雲母、赤色酸化土粒を含む	
67	63		弥生土器	甕	-	-	-	体部上半タテハケ後、平行櫛描文と三角形刺突文。体部下半タテヘラミガキ。	ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
68	52		弥生土器	壺	-	-	-	体部平行櫛描文、波状櫛描文。	ヨコナデ。	明褐灰色(7.5YR7/1)	長石、雲母、石英、角閃石を含む	

掲載番号	実測番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴		色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
69	62	粘土採掘坑-6	弥生土器	甕	-	-	-	体部上半平行櫛描文。	ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を含む	
70	66		弥生土器	甕	18	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	雲母、金雲母を多く含む	
71	65		弥生土器	高杯	-	-	-	口縁部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英、金雲母、角閃石、赤色酸化土粒を含む	
72	68		弥生土器	器台	-	-	-	不明瞭	口縁部に平行する2条の沈線間に二等辺三角形状に沈線を施す。	灰色(N4/1)	1㎜前後の砂粒を多く含む	
73	69	粘土採掘坑-7	弥生土器	壺	-	-	-	平行櫛描文、楕円刺突文を2重、山形文を施す。	ナデ。	明赤褐色(2.5YR5/6)	長石、石英を含む	
74	67		弥生土器	甕	21.8	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰褐色(7.5YR6/2)	長石を含む　雲母、金雲母を多く含む	
75	71	粘土採掘坑-8	弥生土器	壺	17.2	-	-	3条の指頭圧痕文突帯。	ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	1㎜前後の砂粒を含む	
76	29		弥生土器	壺	14	-	-	3条の指頭圧痕文突帯と平行櫛描文。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/3.5)	金雲母、雲母、角閃石を含む	
77	70		弥生土器	壺	10	-	-	口縁端部ヨコナデ。口縁部タテハケ。	ナナメハケ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を含む	
78	27		弥生土器	壺	20.8	10.5	46.1	口縁部ヨコナデ。頸部1条で2段の指頭圧痕文突帯。体部上半ヨコ・ナナメヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部上半ナナメハケ。体部下半タテハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、赤色酸化土粒を含む	
79	73		弥生土器	壺	-	-	-	平行櫛描文後、斜格子文。	ナデと指頭圧痕文。	灰白(10YR8/2)	長石、石英、雲母、角閃石を含む	
80	74		弥生土器	鉢	16	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	体部タテヘラミガキ。	にぶい橙色(5YR6/4)	雲母、角閃石を多く含む赤色酸化粒を含む	
81	75		弥生土器	甕	18.8	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコミガキ。	橙色(5YR6/6)	長石、石英、金雲母を含む	
82	76		弥生土器	甕	19.6	-	-	不明瞭。	不明瞭。	橙色(5YR6/6)	長石、石英を少量含む	
83	31		弥生土器	鉢	-	-	-	体部下半ヘラミガキ。	体部下半ヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	金雲母、雲母、角閃石を多く含む	
84	32		弥生土器	甕	17.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半ヨコヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	角閃石、雲母を多く含む	
85	72		弥生土器	鉢	-	-	-	口縁端部刻目文。口縁部ヨコナデ。体部貝殻腹縁文。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	角閃石、雲母を含む	
86	30		弥生土器	高杯	-	10.3	-	タテヘラミガキ。2個一対の穿孔が2か所有り。	ナデ、指頭圧痕。シボリ有り。	明褐灰色(7.5YR7/2)	角閃石、雲母を含む	
87	2	粘土採掘坑-9	弥生土器	壺	13.7	-	-	口縁部ヨコナデ。2条の指頭圧痕文突帯。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	角閃石、金雲母を含む	
88	1		弥生土器	壺	-	-	-	不明瞭	体部ヨコナデ。	暗灰色(N3/1)	精密	
89	3		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	暗灰色(N3/1)	角閃石、雲母を含む	
90	5	粘土採掘坑-10	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部ヨコナデ。頸部から体部タテハケ。	ナデ。	にぶい褐色(7.5YR6/4)	角閃石、雲母、金雲母を多く含む	
91	4		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部2条沈線後刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙色(5YR6/6)	角閃石、雲母、金雲母を多く含む	
92	78	粘土採掘坑-11	弥生土器	壺	-	-	-	4条の貼付突帯に3条一対の綾状浮文。	シボリ。	橙色(2.5YR6/7)	長石、石英、角閃石を含む	
93	80		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半平行櫛描文。	ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を含む	
94	81	粘土採掘坑-12	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。体部最大径部に5条のヘラ描沈線。	指頭圧痕文。	褐灰色(10YR3/1)	雲母を含む	
95	6		弥生土器	壺	19.3	-	-	口縁端部斜格子文。口縁部ヨコナデ。	不明瞭。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を含む	
96	8		弥生土器	甕	-	-	-	ナデ。	ナデ。	明赤褐色(5YR5/6)	角閃石、雲母を含む	
97	10		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半22条のヘラ描沈線文。沈線文下に刺突文。	ナデ。	灰黄褐色(10YR6/2)	角閃石、雲母を多く含む	
98	9		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。口縁部ヨコナデ。体部上半9条のヘラ描沈線文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石を多く含む	
99	84		弥生土器	甕	-	-	-	ナデ。	ナデ。	橙色(5YR6/6)	長石、石英を含む	
100	82		弥生土器	壺	-	-	10.1	体部下半タテヘラミガキ。	不明瞭。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英を含む	
101	83		弥生土器	蓋	-	-	5.8	ナデ。	ナデ。	橙色(5YR7/6)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
102	79		弥生土器	蓋	-	-	7.6	タテヘラミガキ。	ナデ。	橙色(5YR6/6)	長石、石英、金雲母、角閃石を含む	
103	7		瓦	軒瓦	-	-	-	ナデ。	ナデ。	暗灰色(N3/1)	精密	
104	85	粘土採掘坑-13	弥生土器	壺	13.6	-	-	ユビオサエ後ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、金雲母を含む	
105	88		弥生土器	壺	11.9	-	-	口縁端部円形刺突文、口縁上面三角形刺突文。体部上半平行櫛描文と三角形刺突文。体部下半ヨコヘラミガキ。	ナデ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英を含む	
106	87		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半9条のヘラ描沈線文。	不明瞭。	橙色(5YR6/7)	長石、石英、雲母、角閃石を含む	
107	86		弥生土器	甕				口縁部ナデ。	ナデ。	黄灰色(2.5Y5/1)	長石、石英を含む	
108	21	粘土採掘坑-14	弥生土器	壺	24.2	-	-	口縁端部綾杉文状の刻目文。口縁部ヨコナデ。2条の指頭圧痕文突帯。	口縁端部ヨコナデ。頸部ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英、角閃石を少量含む	
109	25		弥生土器	壺	22.5	-	-	口縁部ヨコナデ。頸部指頭圧痕文突帯。	口縁部ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
110	11		弥生土器	壺	13	-	-	口縁端部斜格子文。口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	角閃石、雲母を多く含む	
111	12		弥生土器	壺	12.7	-	-	口縁端部ヨコナデ。口縁端部刻目文。口縁部に2条の貼付刻目突帯文と平行櫛描文、波状櫛描文。	頸部ユビオサエ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	角閃石、金雲母を多く含む	
112	13		弥生土器	壺	24.1	-	-	口縁端部刻目文。貼り付け刻目文突帯、波状櫛描文、廉状文。耳状の貼付。	口縁端部刻目文。	灰白色(10YR7/2)	長石、石英、雲母、角閃石を多く含む	
113	16		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半12条のヘラ描沈線文。	口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。	灰色(N5/1)	石英を多く含む	
114	24		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半14条のヘラ描沈線文。体部下半タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	雲母、金雲母、角閃石を多く含む	
115	23		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部貼付突帯。体部ヨコミガキ。	体部ヘラミガキ。	灰白色(10YR8/2)	赤色酸化粒、シャモットを含む	
116	15		弥生土器	甕	22.6	-	-	口縁端部円形刺突文。体部上半7条のヘラ描沈線文。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	密	
117	17		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半平行櫛描文。	口縁部ヨコヘラミガキ。体部ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	角閃石、雲母を含む	
118	22		弥生土器	甕	23.2	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半ヘラ描沈線文と三角形刺突文。体部下半縦方向ナデ。	横方向ナデと細いヨコハケ。	灰黄褐色(10YR6/2)	角閃石、雲母を含む	
119	18		弥生土器	甕	16.6	-	-	不明瞭	不明瞭	にぶい橙色(7.5YR7/3)	雲母を含む	
120	14		弥生土器	甕	15.5	-	-	口縁部ヨコナデ。	ナデ。	にぶい橙色(5YR7/3)	角閃石、雲母を含む	
121	20		近世陶器	甕	-	-	-	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰褐色(5YR5/2)	長石、石英、シャモットを含む	備前焼
122	26	粘土採掘坑-15	弥生土器	壺	17	-	-	頸部3条の指頭圧痕文突帯。口縁部に2個一対の穿孔が6か所有り。	2条の貼付刻目突帯文。	浅黄橙色(7.5YR8/3)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
123	89	粘土採掘坑-16	弥生土器	壺	-	-	-	口縁部タテハケ。頸部4条の貼付突帯、2条一対の棒状浮文。体部タテハケ後平行櫛描文、楕円刺突文。	ナデ。	灰白色(10YR7/1)	長石、石英を含む	
124	28		弥生土器	壺	12	-	-	口縁部3条の指頭圧痕文突帯。体部タテハケ後波状櫛描文。	ナナメハケ。	浅黄橙色(10YR8/2)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
125	91		弥生土器	壺	-	-	-	口縁端部刻目文。口縁部ヨコナデ、2条の貼付刻目突帯文。体部タテハケ後平行櫛描文。	ヨコナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/3)	長石、石英、金雲母を含む	
126	90		弥生土器	壺	-	-	-	ヘラ描沈線文で区画文様を施す。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石、雲母、赤色酸化粒を含む	
127	93		弥生土器	高杯	-	-	13.8	貼付刻目突帯文。	上半タテ又はナナメハケ。下半ナデ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を含む	
128	92		弥生土器	回転台形土器	-	-	10.9	タテヘラミガキ。	ナデ。	浅黄橙色(10YR8/3)	角閃石、雲母、赤色酸化粒を含む	
129	94		弥生土器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	灰黄褐色(10YR5/2)	長石、石英、雲母を多く含む	
130	96		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半14条のヘラ描沈線文。体部下半ナデ。	ナデ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英、金雲母、角閃石を含む	
131	95		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部貼付突帯文。体部ナデ。	ナデ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英、金雲母を含む	
132	97	粘土採掘坑-18	弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部貼付突帯文。体部上半10条のヘラ描沈線。体部下半ナデ。	ナデ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を含む	
133	99		弥生土器	甕	19.5	-	-	体部タテハケ。	体部ヨコヘラミガキ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を含む	
134	98		弥生土器	甕	14.5	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後ナナメヘラミガキ。	口縁部ヨコヘラミガキ。体部上半指頭圧痕文。体部下半ナナメハケ。	にぶい橙色(5YR6/5)	長石、石英、角閃石、雲母を含む	
135	102	粘土採掘坑-21	弥生土器	高杯	-	-	-	脚部タテハケ後ヨコナデ。	受部ミガキ。脚部ナデ、シボリ。	橙色(5YR7/7)	水縅し粘土	
136	100		弥生土器	壺	-	-	5.4	タテハケ。	ナデ。	灰白色(10YR8/2)	密	
137	101		弥生土器	高杯	-	-	-	ハケ後面取り。	クモの巣状ハケ。	橙色(5YR7/6)	水縅し粘土	

掲載番号	実測番号	掲載遺構名	種別	器種	法量（cm）			特徴		色調	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面	内面			
138	103	粘土採掘坑-24	土師器	甕	-	-	-	口縁部平行櫛描文。体部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英を含む	
139	104		弥生土器	高杯	-	-	-	口縁部ヨコナデ。	ヘラミガキか。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	水簸し粘土	内外面丹塗り
140	130	遺構に伴わない	弥生土器	甕	23	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部上半ヨコナデ。	ナデ。	灰褐色(7.5YR5/2)	長石、石英、角閃石、雲母を含む	
141	113		弥生土器	壺	24	-	-	口縁部ヨコナデ。頸部４条の貼り付け突帯に棒状浮文を施す。	口縁部ヨコナデ。３条の直線貼付突帯文と弧状の貼付突帯文。体部、頸部ナデ。	橙色(2.5YR6/7)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
142	159		縄文土器	深鉢	-	-	-	口縁部貼付刻目突帯文。体部斜め方向のヘラ描沈線文。	ナデ。	にぶい褐色(7.5YR6/3)	角閃石、雲母を含む	
143	144		弥生土器	壺	12	-	-	口縁端部刻目文。口縁部４条の指頭圧痕文突帯、平行櫛描文と波状櫛描文。	ナデ。	にぶい橙色(5YR7/4)	長石、石英、赤色酸化粒を含む	
144	158		弥生土器	甕	22.1	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケと二重の刺突文。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英を含む	
145	155		弥生土器	甕	-	-	-	口縁端部刻目文。体部上半11条のヘラ描沈線文。体部下半ナデ。	ユビオサエ後ヨコナデ。	にぶい褐色(7.5YR5/3)	長石、石英、角閃石、雲母を含む	
146	156		弥生土器	甕	17.6	-	-	口縁部貼り付け突帯文。体部上半平行櫛描文と波状櫛描文。	ナデ。	にぶい褐色(7.5YR)	長石、石英を含む	
147	150		弥生土器	甕	22.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	橙色(5YR7/4)	長石、石英を多く含む	
148	157		弥生土器	甕	27.6	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ後粗密なヨコヘラミガキ。	灰白色(10YR8/1.5)	精密	
149	145		弥生土器	甕	24.4	-	-	口縁端部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	精密	
150	151		土師器	甕	-	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英を含む	
151	149		土師器	鉢	12.7	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部タテヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、雲母を含む	
152	148		瓦質土器	羽釜	-	-	-	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰色(N4/1)	長石、角閃石、雲母を含む	
153	152		中世須恵器	甕	14.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部平行タタキ。	口縁部ヨコナデ。内面ヨコハケ、ナデ。	灰白色(2.5Y8/1)	精密	
154	153		中世須恵器	小皿	7.9	5	1.7	回転ナデ。底部イトキリ。	回転ナデ。	灰色(N7/1)	精密	備前焼
155	154		中世須恵器	小皿	7.9	5	1.7	回転ナデ。底部イトキリ。	回転ナデ。	灰色(N6/1)	精密	備前焼
156	146		近世陶器	摺鉢	-	18.3	-	回転ナデ。	密な摺り目。	赤褐色(10YR5/4)	長石、石英を含む	備前焼
157	147		瓦	軒丸瓦	-	-	-	ナデ。	ナデ。	暗灰色(N3/1)	精密	瓦当直径14cm
158	5	土壙-12	弥生土器	鉢	17.5	-	-	口縁部、体部ナデ。	口縁部ヨコハケ。体部ヨコミガキ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英を多く含む 角閃石、金雲母を含む	
159	11		弥生土器	鉢	17.6	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半ハケ。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部上半ヨコハケ。体部下半タテヘラミガキ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英を多く含む 角閃石を含む	
160	10		弥生土器	鉢	16.3	7.3	16.3	ヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部タテヘラミガキ。	橙色(2.5YR6/6)	長石、石英、角閃石、赤色酸化土粒を含む	体部下半に被熱痕。
161	53		弥生土器	鉢	16.5	-	-	口縁部貼り付け突帯。	体部タテヘラミガキ。	褐灰色(7.5YR5/1)	長石、石英多く含む 金雲母、角閃石を少量含む	被熱で器面が剥離。
162	28		弥生土器	鉢	17.8	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を多く含む 角閃石、雲母を含む	
163	30		弥生土器	鉢	17.6	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。２個一対の穿孔有り。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	灰褐色(7.5YR5/2)	長石、石英を含む 赤色酸化土粒を僅かに含む	
164	34		弥生土器	壺	-	-	-	口縁部ヨコナデ。口縁部に３条の指頭圧痕文突帯。	ヨコナデ。	明褐灰色(7.5YR7/2)	長石、石英を含む 角閃石、雲母を僅かに含む	
165	48		弥生土器	壺	17.5	-	-	口縁部４条の指頭圧痕文突帯、平行櫛描文、波状櫛描文。	口縁部ヨコナデ。頸部から体部ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR7/4)	長石、石英を角閃石、金雲母を含む	
166	35		弥生土器	壺	9.6	-	-	不明瞭。	不明瞭。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を含む 角閃石を少量含む	
167	32		弥生土器	壺	7.8	-	-	口縁部タテハケ後平行櫛描文と波状櫛描文。	ヨコナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英、角閃石を含む 金雲母を少量含む	
168	33		弥生土器	壺	8.8	-	-	口縁部平行櫛描文と波状櫛描文。	ヨコナデ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	
169	3		弥生土器	壺	-	5.8	-	体部タテヘラミガキ。	体部ナデ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英、角閃石を含む	
170	52		弥生土器	壺	-	-	-	頸部に２条の貼付刻目突帯文。体部上半タテハケ後、平行櫛描文、波状櫛描文、刺突文。体部下半ヨコヘラミガキ。	指頭圧痕後ナナメ又はヨコハケ。	橙色(7.5YR7/6)	長石、石英を含む 金雲母を少量含む	
171	26		弥生土器	甕	19.7	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコミガキ。体部ハケ後ヨコヘラミガキ。	明黄褐色(5YR5/6)	長石、石英を含む 角閃石、金雲母を少量含む	
172	29		弥生土器	甕	19.8	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半ナナメヘラミガキ。	口縁部ヨコヘラミガキ。体部タテヘラミガキ。	褐灰色(10YR5/1)	長石、石英を含む 角閃石を少量含む	
173	27		弥生土器	甕	21.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	灰黄褐色(10YR6/2)	長石、雲母を少量含む	
174	13		弥生土器	甕	19.7	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	橙色(5YR6/6)	長石、石英、金雲母を含む	
175	14		弥生土器	甕	21.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英を含む 雲母、金雲母を少量含む	
176	18		弥生土器	甕	15.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英を多く含む 角閃石、雲母を含む	
177	49		弥生土器	甕	16.1	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケとハケ状工具による刺突文。体部下半タテヘラミガキ	口縁部ヨコナデ。体部上半ナナメヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	にぶい橙色(5YR7/4)	長石、石英を含む 金雲母を少量含む	
178	9		弥生土器	甕	17.7	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後ヨコ・ナナメヘラミガキ。	灰褐色(7.5YR6/2)	長石、石英、角閃石を少量含む	
179	7		弥生土器	甕	26.8	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む 金雲母を少量含む	
180	50		弥生土器	甕	-	7.7	-	タテヘラミガキ。刺突文。	体部上半ヨコヘラミガキ。体部下半タテヘラミガキ。	灰黄褐色(10YR5/2)	長石、石英を含む 金雲母、角閃石を少量含む	
181	12		弥生土器	甕	-	6	-	体部タテヘラミガキ。	体部上半ヨコヘラミガキ。体部下半指頭圧痕後タテヘラミガキ。	灰白色(10YR7/1)	長石、石英を含む 角閃石を少量含む	
182	6		弥生土器	甕	19.4	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケと楕円の２重刺突文。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後ヘラミガキ。	橙色(5YR7/6)	長石、石英、角閃石を含む 赤色酸化土粒を少量含む	
183	21		弥生土器	甕	21.5	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ後粗密なヨコヘラミガキ。	灰白色(2.5Y7/1)	長石、石英、赤色酸化土粒を少量含む	
184	20		弥生土器	甕	17.1	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部タテハケ。体部指頭圧痕後ハナナメハケ後粗密なヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、金雲母を含む	
185	23		弥生土器	甕	18.6	-	-	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ。体部下半タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケで一部ナナメハケ。体部下半タテヘラミガキ。	灰白色(10YR7/1)	長石、石英を含む 金雲母、角閃石を僅かに含む	
186	1		弥生土器	甕	18.3	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ後粗密なヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(5YR6/4)	長石、石英、金雲母、角閃石、赤色酸化土粒を含む	
187	8		弥生土器	甕	27.5	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケと不整円形刺突文。	口縁部ヨコナデ。体部上半ナナメハケ後ヨコヘラミガキ。体部下半タテハケ後ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英を含む 金雲母、角閃石を少量含む	
188	17		弥生土器	甕	17.6	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ後ヨコヘラミガキ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英、角閃石を含む 雲母を少量含む	
189	2		弥生土器	甕	16.5	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケ、ナナメハケ。体部下半タテヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、石英、角閃石を含む	
190	22		弥生土器	甕	18.8	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	灰白色(10YR7/1)	長石、石英、雲母を含む	
191	24		弥生土器	甕	16	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ。	口縁部ヨコナデ。	橙色(5YR7/6)	長石、石英、角閃石を含む	
192	41		弥生土器	甕	-	6.6	-	体部タテヘラミガキ。	体部ナデ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英を多く含む 金雲母、角閃石を含む	
193	42		弥生土器	甕	-	5.9	-	体部タテヘラミガキ後、底部付近一部ヨコヘラミガキ。	体部斜め方向ナデ。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英を含む 角閃石を少量含む	
194	39		弥生土器	甕	-	9.1	-	体部タテヘラミガキ。底部付近ヨコナデ	体部下半タテヘラミガキ。	にぶい黄橙色(10YR6/3)	長石、石英、角閃石、金雲母を含む	
195	38		弥生土器	甕	-	6	-	体部タテヘラミガキ。	体部内面ナデ。	黄灰色(2.5Y5/1)	長石、石英、雲母を含む	
196	36		弥生土器	甕	-	5.6	-	体部タテヘラミガキ。底部付近ヨコナデ。	体部縦方向ナデ。	にぶい黄橙色(10YR7/2)	長石、石英を少量含む	
197	46		弥生土器	高杯	-	-	-	タテヘラミガキ。	受け部ナデ。	褐灰色(10YR4/1)	長石、石英を多く含む 雲母、角閃石を少量含む	
198	45		弥生土器	高杯	-	-	-	タテヘラミガキ。	ナデ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英を多く含む 角閃石を含む	
199	44		弥生土器	鉢	-	7.6	-	体部から脚部タテヘラミガキ。	受け部ヨコヘラミガキ。	灰白色(10YR8/2)	長石、石英、雲母を含む	
200	19		弥生土器	高杯	17.8	-	-	口縁部ヨコナデ。体部タテハケ後タテヘラミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ハケ後ヨコヘラミガキ。	にぶい橙色(7.5YR6/4)	長石、金雲母を少量含む 角閃石、石英を僅かに含む	
201	15		弥生土器	甕	14.8	6.6	-	口縁部ヨコナデ。体部不明瞭。	口縁部ヨコナデ。体部ナナメハケ。	にぶい橙色(7.5YR7/3)	長石、石英を多く含む 角閃石、金雲母を含む	被熱で器面が剥離。

遺物観察表（石器）

番号	掲載遺構名	時期・時代	器種	形式	計測最大値(mm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石材	残存	備考
S 1	溝－1	弥生時代	石製円盤		57	56.5	10.5	50.5	流紋岩（溶岩）	完	
S 2	粘土採掘坑－2	弥生時代	石斧	太型蛤刃石斧	45.5	60.5	46.5	175.3	玢岩	欠	
S 3	粘土採掘坑－8	弥生時代	スクレイパー		40	25.5	5.5	7.3	サヌカイト	完	石包丁転用　ケイ酸が付着
S 4	粘土採掘坑－10	弥生時代	打製石包丁		132	47	10	64.4	結晶片岩	完	未製品
S 5	粘土採掘坑－16	弥生時代	敲石		119	56.5	25.5	275.7	玢岩	完	石斧転用
S 6	粘土採掘坑－18	弥生時代	打製石包丁		54.5	50	8.2	25.3	サヌカイト	欠	ケイ酸が付着
S 7	粘土採掘坑－24	弥生時代	磨製石包丁		105	43	10.5	70.6	粘板岩	欠	
S 8	粘土採掘坑－21	弥生時代	砥石		283	161.5	93	4620	砂岩	完	
S 9	遺構に伴わない	弥生時代	石斧	太型蛤刃石斧	65.5	63	42	303.4	玢岩	欠	
S10	遺構に伴わない	弥生時代	石鏃		13	13.5	1.8	0.2	サヌカイト	欠	
S11	遺構に伴わない	弥生時代	石錐		26	11.5	4	1	サヌカイト	欠	
S12	遺構に伴わない	弥生時代	磨製石包丁		35.5	37	7	14.2	溶結凝灰岩	欠	
S13	遺構に伴わない	弥生時代	磨製石包丁		88	64.5	19	151.8	流紋岩（溶岩）	欠	未製品か
S14	遺構に伴わない	弥生時代	砥石		57	42.5	12	37	流紋岩（溶岩）	欠	
S15	遺構に伴わない	弥生時代	石製円盤		37	36.5	15.3	30.1	サヌカイト	完	
S16	土壙－12	弥生時代	尖頭器		145.5	37	12	83.5	サヌカイト	完	二上山産サヌカイトか

報告書抄録

ふりがな	ふなやまいせき
書名	船山遺跡
副書名	県道西大寺備前線交差点改良工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	155
編著者名	平井勝　井上弘　大橋雅也　時實奈歩
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2001年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ふなやまいせき 船山遺跡	おかやまけん 岡山県 びぜんし 備前市 はたけだ 畠田	211		34° 43′ 30″	134° 6′ 55″	1997. 6. 11 6. 12 1998. 1. 9 ～ 1998. 3. 31 1999. 4. 5	650㎡	県道西大寺備前線交差点改良工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船山遺跡	集落址	弥生時代	竪穴住居1軒 土壙11基 溝3条	縄文土器 弥生土器　石器 須恵器　土師器	

図版１

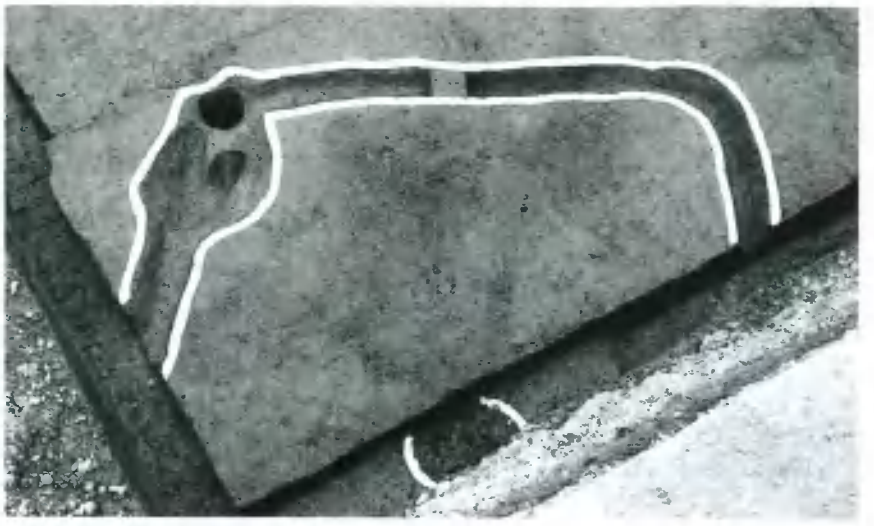
1．遺跡近景（南から）

2．１区近景（南から）

3．１区の作業風景
（北から）

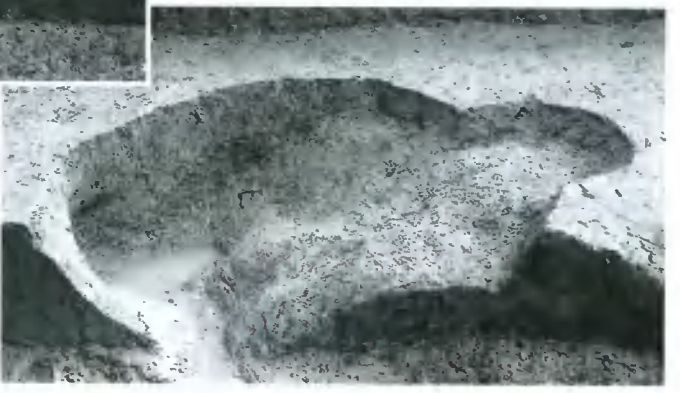
図版 2

1．竪穴住居－1
（南東から）

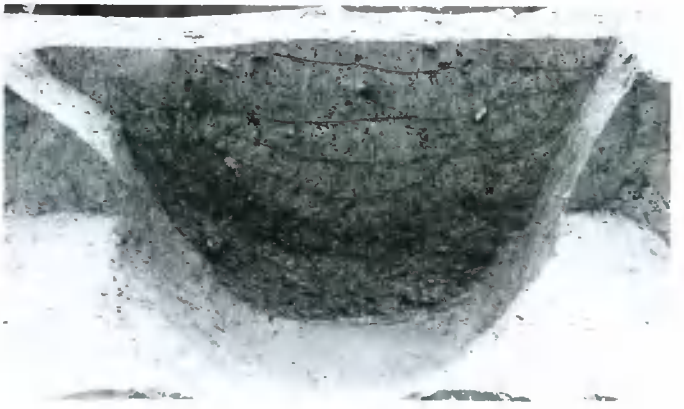


2．土壙－1検出状況
および断面（西から）

3．土壙－1（西から）



4．土壙－2（北から）



5．土壙－2断面（北から）

1．土壙－3（西から）

2．土壙－7〈向う側〉・8〈手前〉（西から）

3．溝－1（北から）

4．4区全景（北から）

5．5区全景（北から）

6．土壙－12（東から）

図版 4

1

2

3

4

1．土壙－2出土遺物

5

7

6

2．土壙－4出土遺物

8

9

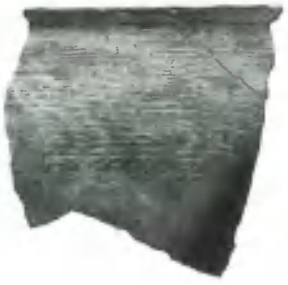
10

10の拡大

11

11の拡大

3．土壙－6出土遺物(1)



12

12 の拡大

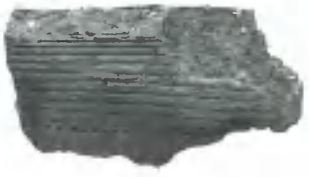
13

14 の拡大

14

15

15 の拡大



16

17

1．土壙－6出土遺物(2)

2．土壙－10出土遺物

図版 6

20

21

22

23

24

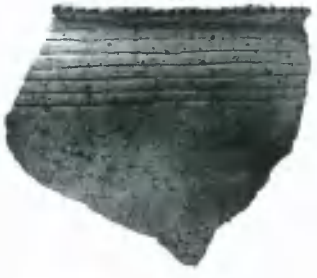
S 1

1．溝－１出土遺物

25

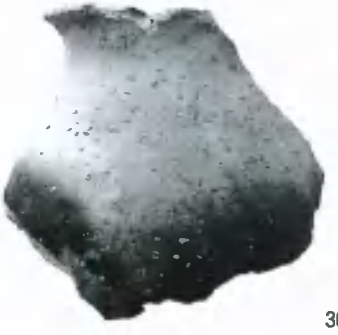
26

27



28

29



30

31

31の拡大

2．溝－２出土遺物(1)

32

32 の拡大

33

33 の拡大

23

1．溝－2出土遺物(2)

35

35 の拡大

36

36 の拡大

37

2．溝－3出土遺物

図版 8

40

50

61

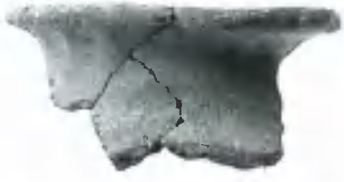
66

71

80

94

97


104

105（上面）

114

117

105

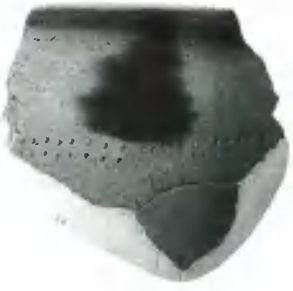
118

130

1．粘土採掘坑出土遺物

140

143



144

1．遺構に伴わない遺物

146

S13

S6

S7

S8

S4

2．包含層・粘土採掘坑出土遺物

図版10

159

160

165

177

170

186

198

201

S16

1．土壙－12出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 155

船山遺跡

県道西大寺備前線交差点
改良工事に伴う発掘調査

平成13年2月27日　印刷
平成13年2月28日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印　刷　株式会社 三門印刷所
岡山市高屋116-7